(社)中国建設弘済会事務所建設に伴う

天神遺跡第11次発掘調査

2001年3月

(社)中国建設弘済会
出雲市教育委員会

（社）中国建設弘済会事務所建設に伴う

天神遺跡第11次発掘調査

2001年3月

（社）中国建設弘済会
出雲市教育委員会

序

天神遺跡は、出雲市天神町一帯の広範囲に遺物が散布する周知の遺跡で、これまでに何度も発掘調査が実施されています。

このたびは社団法人中国建設弘済会の出雲支部建設に伴い、発掘調査を実施いたしました。

隣接しております国土交通省庁舎の敷地は1986年に調査しており、多くの遺構・遺物を検出しておりますが、今回の調査ではすでに半分近くが破壊されていたこともあって、このとき検出されたものとの関連を知ることはできませんでした。

しかし、規模は小さいながらも遺構・遺物を検出しており、これらは今後天神遺跡の実態、また出雲平野の全貌を明らかにする上で貴重な資料となることでしょう。

最後になりましたが、この調査を行うに当たりましてご協力いただきました社団法人中国建設弘済会の皆様、関係各位に心から感謝いたします。

2001年３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

例　　言

1．本書は、1999年（平成11年）に社団法人中国建設弘済会の委託を受けて実施した、社団法人中国建設弘済会島根支部建設工事に伴う下記の遺跡の発掘調査の調査報告書である。

天神遺跡（第11次調査）……島根県出雲市塩冶有原町５丁目９番１

2．調査組織は次の通りである。

調 査 主 体　出雲市教育委員会
事　務　局　大田　　茂（文化振興課長）
　　川上　　稔（同　課長補佐）
調　査　員　片倉　愛美（同　　主事）
調査補助員　福田　和美（同　臨時職員）
　　伊藤めぐみ（　　同　　）

3．調査にあたり、守岡正司氏（島根県教育委員会）に指導を受けた。

4．本書で使用した方位は磁北を示す。

5．遺構の浄書は福田、伊藤が行った。遺物の実測、浄書、写真の撮影はは伊藤、片倉が行った。

6．発掘調査には次の方々に従事して頂いた。

秦　　幸正　　山根　誠一　　藤江　　実　　高橋ナツエ
松井　和代　　岸　　玉恵　　来間　達夫　　公田　悦朗

7．本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SD－溝状遺構　　SK－土坑状遺構　　P－ピット

8．本書の執筆、編集は片倉が行った。

9．調査にあたっては、社団法人　中国建設弘済会から多大な協力を得た。

10．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

序
例言
本文目次
挿図目次

調査に至る経緯……1

位置と環境……2

調査の概要

1．発掘調査の概要……4
2．遺構と遺物……6
3．小結……20
出土遺物観察表……21

図　　版……図版1～12

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図……3
第２図　調査区全体図……5
第３図　SK02実測図……6
第４図　SK02出土遺物実測図……6
第５図　SK03実測図……7
第６図　(1)SK03出土遺物実測図……8
〃　(2)SK03出土遺物実測図……9
第７図　SD01実測図……9
第８図　SK04，05，06，Ｐ１，Ｐ２実測図……10
第９図　SK07，08，09実測図……11
第10図　SK08出土遺物実測図……11
第11図　SD02実測図……11
第12図　SK10，11実測図……12
第13図　SK12，13実測図……12
第14図　SK14，15，Ｐ３実測図……13
第15図　SK16，Ｐ４実測図……13
第16図　SK17実測図……13
第17図　SK18，19，20実測図……14
第18図　(1)遺構外遺物実測図（弥生土器他）……15
〃　(2)遺構外遺物実測図（弥生土器他）……16
第19図　遺構外遺物実測図（須恵器）……17
第20図　遺構外遺物実測図（土師器他）……19

調査に至る経緯

社団法人　中国建設弘済会は出雲市塩冶有原町に島根支部の事務所建設を予定していたが、周知の遺跡である天神遺跡の範囲内であったため、平成10年12月に出雲市教育委員会に調査依頼があった。

建設予定地は建設省（現国土交通省）出雲工事事務所の敷地に隣接しているが、現在建っている庁舎建設の際も発掘調査を行って多くの遺構・遺物を確認している。（註１）そのため、あえて破壊行為となるような試掘調査は行わず、翌平成11年４月から建物が建つ部分280㎡の本調査をすることとなった。

最初に、重機により表土から１ｍまで掘り下げたところ、この１ｍはほとんどが造成土で、他の天神遺跡での調査で検出されている近世などの遺構が確認されている層はすでに削られており、撹乱層に含まれていた遺物等も、遺構に伴っていたのかどうかは確認できない状況であった。

その上、調査区の南側の全体の約１／３は深さ３ｍ近くまでさらに掘り下げられており、コンクリート片などの産業廃棄物が投げ込まれて、埋め立てられている状態であった。

しかし、調査区の東側部分では、これまで調査された天神遺跡で弥生時代の遺物や遺構が確認されている淡黄褐色のシルト層が広がっており、遺構らしきものが確認された。また、西側はその１層上の暗赤褐色層が残っていたため、この面で重機での掘削を止め、人力での掘削に切り替えた。この層もすでに上の方は削られていたらしく、すぐ上面の撹乱層の中に同一個体の破片が含まれたりしていた。

調査区は破壊されている部分を除いて、５ｍ×５ｍのグリッドを９カ所設定したのち、発掘調査を進めていった。

調査は平成11年４月27日に開始し、同年７月３日に終了した。

・註１　　建設省新庁舎建築に伴う天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ

1986年３月　　出雲市教育委員会

位置と環境

天神遺跡は出雲平野のほぼ中央、出雲市塩冶有原町を中心に広がっている遺跡である。この範囲は現在確認されているだけで約6,000㎡以上に及ぶ。

遺跡が形成された当時は平野は完全にはまだ形成されておらず、入海（現在の神門水海）がかなり入り込んでいる広い水域を持っていた。現在のような地形になったのは、それまで西進して大社湾に注いでいた斐伊川が逆流し、東進して宍道湖に流れ込むようになった江戸時代以降のことである。

押し寄せる開発の波を受け、出雲平野でも数多くの発掘調査が行われ、多くの遺跡が確認されている。これらを時代別に概観する。

〈縄文時代〉

平野の北側にある縄文早期の菱根遺跡のあと、早期末の上長浜貝塚があるが、それに続く縄文時代の遺跡は確認されていない。しかし、後期・晩期になると三田谷Ⅰ遺跡や原山遺跡などが生活の場になっていたことが窺えるような遺物が出土していることから、この当時は平野の縁辺部が活動拠点になっていたと考えられる。

〈弥生時代〉

自然堤防の微高地上に遺跡が築かれる。前期にはそれほど目立った遺跡は存在していないが、中期以降になると天神遺跡、下古志遺跡、田畑遺跡など巨大な集落の出現がみられる。矢野遺跡、知井宮多聞院遺跡では貝塚を伴っている。これらの遺跡は古墳時代前期まで継続して拡大を続けていく。

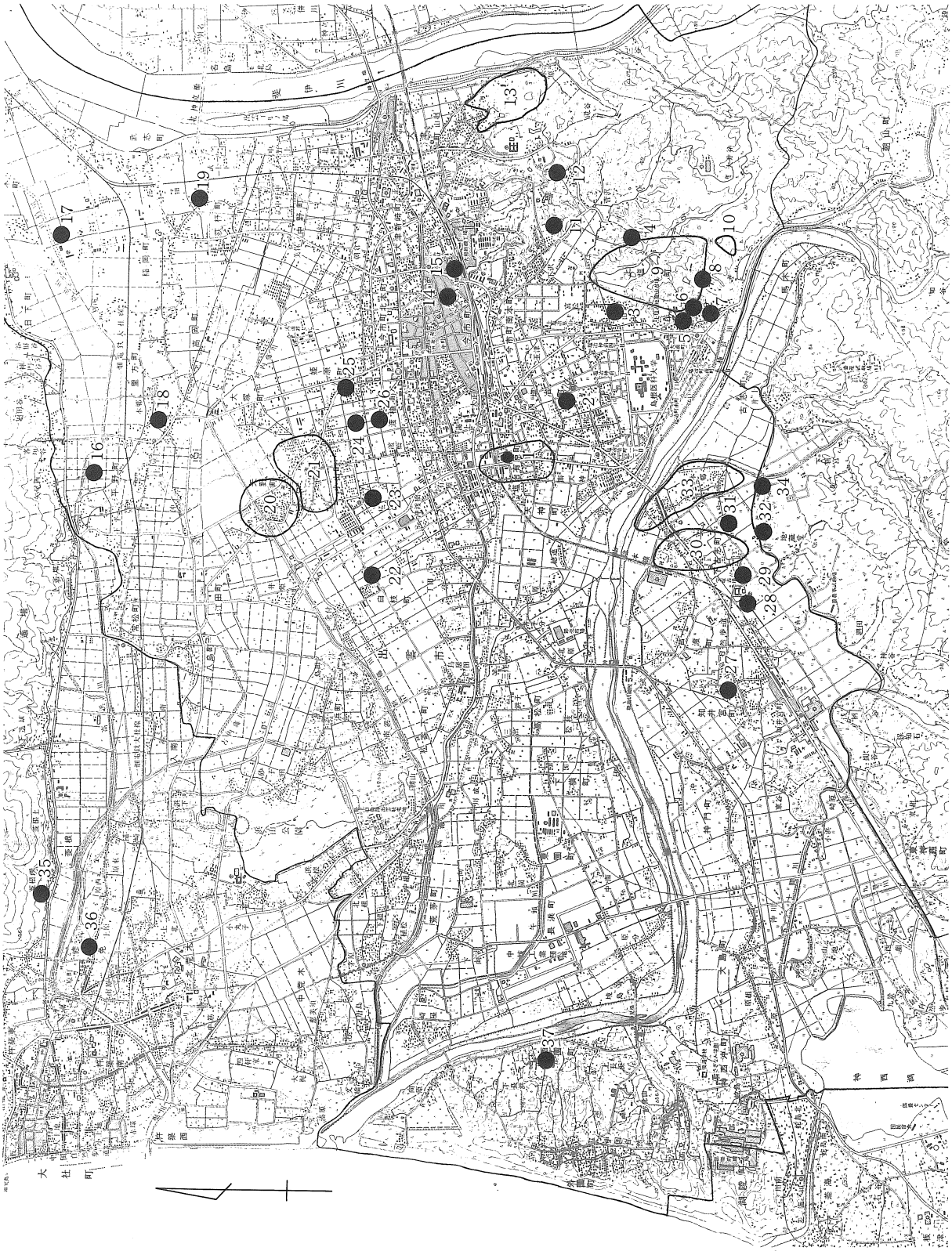
一方、斐伊川を望む丘陵上に四隅突出型という特異な形状の墳墓が築かれる。西谷墳墓群は弥生墳丘墓や古墳が密集しており、弥生墳丘墓からは吉備や北陸など、他地域の土器が検出されている。この時期は出雲平野の覇者が一番勢力を拡大していた時期だと考えられている。

〈古墳時代〉

前期の古墳としては、西谷墳墓群の中の７号墓が、中期には大寺古墳が築造されるが、その他の遺跡には目立ったものがみられない。後期にはいると、今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳など、出雲東部に匹敵するような規模の古墳が築かれるようになる。また、丘陵斜面などには上塩冶横穴墓群のように180基以上の横穴墓が築かれる。しかし、それを支えた人々が居住していたであろう集落などは未だ確認されていない。

〈奈良時代〉

これまで奈良時代の遺跡はあまり確認されていなかったが、平成10年度に古志本郷遺跡で神門郡家の一部と思われる遺構が発見された。光明寺３号墓などの初期火葬墓も４例が知られており、神門寺境内廃寺や長者原廃寺など仏教文化の導入が窺える。



1. 天神遺跡
2. 神門寺境内廃寺
3. 上塩冶柴山古墳
4. 大井谷墳跡
5. 地蔵山古墳
6. 半分城跡
7. 三田谷Ⅰ遺跡
8. 三田谷Ⅱ遺跡
9. 上塩冶横穴墓群
10. 光明寺古墳群
11. 下沢古墳
12. 菅沢古墳
13. 西谷墳墓群
14. 塚山古墳
15. 今市大念寺古墳
16. 里方八石原遺跡
17. 山持川川岸遺跡
18. 高浜Ⅰ遺跡
19. 荻狩古墓
20. 矢野遺跡
21. 小山遺跡
22. 白枝荒神遺跡
23. 渡橋沖遺跡
24. 蔵小路西遺跡
25. 姫原西遺跡
26. 渡橋遺跡
27. 知井宮多聞院遺跡
28. 天神原古墳
29. 宝塚古墳
30. 下古志遺跡
31. 田畑遺跡
32. 妙蓮寺山古墳
33. 古志本郷遺跡
34. 放れ山古墳
35. 菱根遺跡
36. 原山遺跡
37. 上長浜貝塚

第1図　周辺の遺跡分布図

調査の概要

（１）発掘調査の概要

今回の調査区は、広範囲に広がっている天神遺跡の中でも、標高が南に向かって徐々に高まっている場所である。

重機によって調査区の南側の遺構は一部は消滅、東側は上部が削られているような状態であったが、西側については遺構面の上層になる遺物包含層が残っていた。このため、東側は重機で遺構面まで掘り下げ、西側は包含層まで掘り下げた後に人力で掘り下げていった。

調査予定面積は全体で280㎡であったが、重機による撹乱のため実際に調査したのは約220㎡である。ここに東西、南北とも５ｍ間隔（１部５ｍ50㎝）のグリッドを設定した。

層序（第２図）

比較的残りのよい調査区西側で層序の確認を行った。調査範囲がそれほど広くないため、調査区のどの面でもほぼ同じ堆積状況であった。

上から撹乱層（造成土も含まれる）、黄灰色（オレンジ色の斑点あり）、暗灰黄色、黒褐色（遺物包含層）、褐色シルト層（遺構面）となっている。

遺構（第２図）

遺構は土壙状遺構が20、溝状遺構２、ピット４を検出した。しかし、遺物を伴っていたのはＳＫ０２、ＳＫ０３、ＳＫ０８、ＳＤ０２のみであった。また、遺構内部に堆積していた土も遺物包含層としている黒褐色土のみのため、個々の遺構の詳しい性格についてはほとんど不明である。

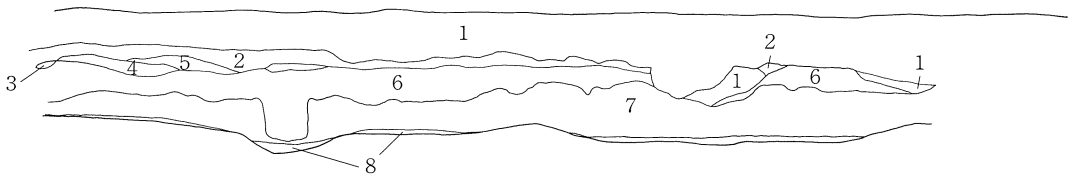
今回の調査区のすぐ北側は1986年から1987年にかけて建設省（現国土交通省）新庁舎建設に伴って調査が行われているが（天神遺跡第５次調査）（註１）、その際に検出された弥生時代中期中葉の副葬品を伴うような遺構や、古墳時代後期の竪穴式住居と考えられる遺構、その他関連が考えられるものは検出されなかった。

時期としては、中世以降（ＳＫ０１、ＳＫ０８？）、弥生時代（その他の遺構）と考えられる。

遺物

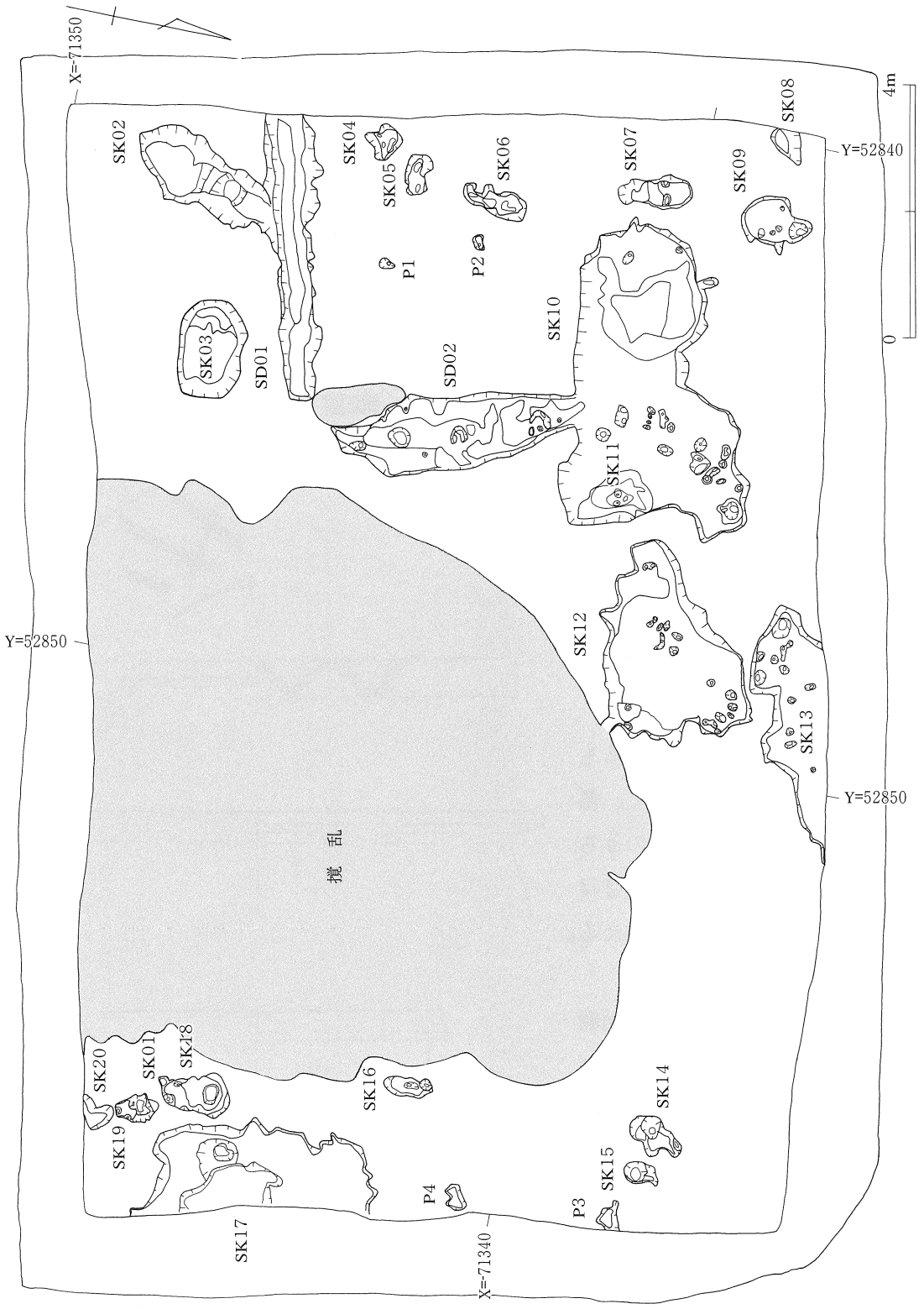
遺物はこれまで行われた天神遺跡の調査の中でも格段に少なく、検出された遺物の量はコンテナ一箱分であった。上層が撹乱を受けている影響もあってか、遺物包含層は遺構面のすぐ上層である黒褐色層１層のみであった。しかし、造成土やすでに破壊されている部分からも遺物が一部検出されており、破壊されている部分にも他の部分と同じくらいの遺構・遺物が存在していたものと思われる。

遺物は弥生土器がもっとも多く、須恵器、土師器、陶磁器類も若干出土している。しかし、須恵器、土師器、陶磁器についてはそれに関連する遺構もないことから、おそらく外からの流れ込みである可能性が高いと思われる。



①撹乱層
②2.5YR 4/1　黄灰色
③撹乱層
④2.5YR 4/1　黄灰色　錆色の斑点が多い
⑤2.5YR 5/2　暗黄灰色
⑥7.5YR 3/2　黒褐色　遺物包含層
⑦10YR 5/4　褐色　遺構面
⑧7.5YR 7/6　黄橙色

第2図　調査区全体図



第2図　調査区全体図

（２）遺構の概要

〈ＳＫ０１〉

上部はすでに重機によって削られていたため、規模は不明である。ＳＫ１８の真上に掘られており、遺物包含層と考えている黒褐色層から遺構が掘り込まれている。この層にある遺構はこれのみだが、第９次調査の際、弥生時代の遺構面の上層に中世の遺構面があったことから、これもほぼ同時期に当たるのではないかと推測される。しかし、この遺構に伴う遺物は見つかっていない。

〈ＳＫ０２〉（第３図）

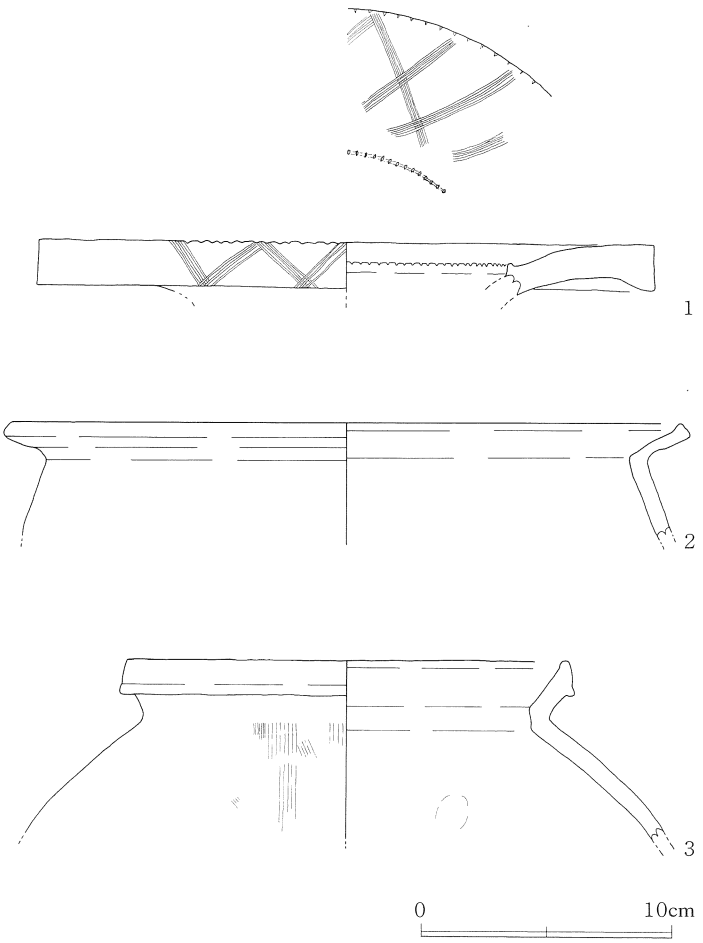
南北が2.95m、東西が1.4m、深さは55.0cmで、不整形な楕円形を呈している。他の遺構に比べてしっかりと深く掘り込まれている。遺構の北端はＳＤ０１と重なってしまっているが、切り合い関係からＳＤ０１が作られた後に、ＳＫ０２が掘り込まれたものと考えられる。遺構の内部に堆積していたのは黒褐色土のみである。土器片が100点近く伴っており、そのほとんどが弥生時代中期から後期にかけてのものであった。

〈ＳＫ０２出土遺物〉（第４図）

出土した土器片の点数は100点近くあるものの、ほとんどが同一個体のものが多く、個体数としては４個体ほどであった。そのうち実測可能であったものは３点であり、１、２は松本編年のⅢ－１式、３はⅢ－２式にあたる。（註２）

１は広口壷の口縁部である。口縁部が朝顔形に大きく開き、外面、内面ともにハケや断面三角形突帯文を施している。２は無頸壷の口縁部である。３は広口壷の口縁部であるが、１とは違いさらに小型のものと考えられる。外面にハケ目が残っているが、部分的にナデ消されている。

第3図　SK02実測図

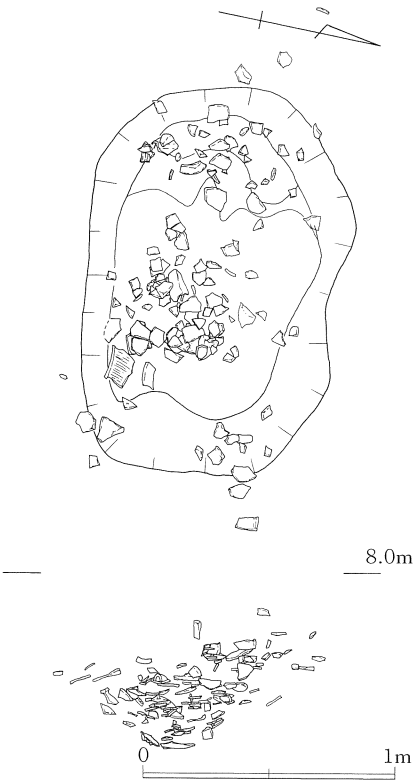


第4図　SK02出土遺物実測図

〈ＳＫ０３〉（第５図）

南北が1.2m、東西が1.9m、深さが21.0㎝のきれいな楕円形を呈している。ＳＫ０２同様他の遺構と比べてしっかりと掘り込まれている。遺構の内部からは200点以上の土器片が出土しているが、その中で握り拳大の石が伴っており、その石は遺物と遺物の間に挟まれるようにして検出された。このことから、偶然石が入り込んだものではなく、意図的に入れられたものではないかと思われる。

また、遺物を接合した際、遺構内部から出土したものと遺構周辺から出土したものが同一個体であるものが何点かあった。重機によりすでに破壊されている部分から近いこと、またＳＫ０３付近で確認した土層では遺構面のすぐ上層まで重機によって破壊されていたことから、遺構上部はすでに破壊されていた可能性もある。



第5図　SK13実測図

〈ＳＫ０３出土遺物〉（第６図）

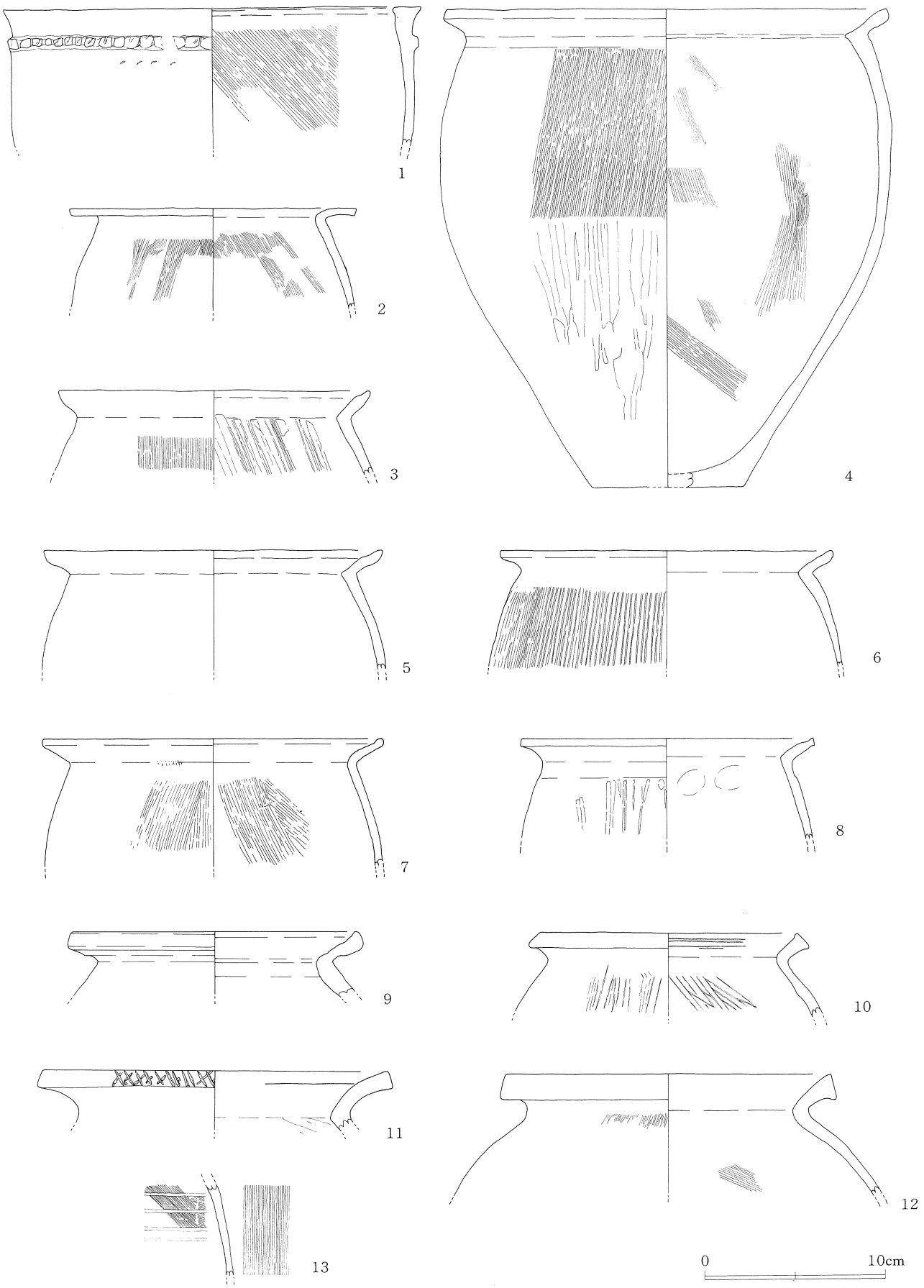
弥生時代前期から中期のものが出土している。ＳＫ０２と違って破片数も多い上に、個体数も多く完形に近いものは１個体だけであった。１から３、５から12は甕の口縁部である。１は緩く外反しており、端部は面を持っている。外面は突帯文、内面にはハケ目を施す。２は口縁部が大きく外反し、体部から口縁部まで厚さがほぼ均一である。内外面にハケ目を施す。３から６は口縁部の外反が緩く、端部も先細りや丸く仕上げられている。３は外面は細かいハケ目、内面は目の大きなハケ目で仕上げられている。４の外面は胴部の中央より下がミガキ調整である。５は内外面ともナデ、６は外面がやや目の大きなハケ目、内面はナデ調整、７は内外面とも細かいハケ目調整である。

８から12は、口縁部の端部に面がある。８は端部が真っ直ぐ仕上げられているため小さな面ができているが、９から12は意識して面を大きく作っているものである。11は口縁部外面にもヘラ状工具により施文されている。８、10は外面にやや粗い目のハケ目調整が施されているが、その他のものについてはナデ調整である。12は内外面ともに細かいハケ目があったものと思われる。１はⅡ－１式、２から７はⅢ－１式、８から12はⅢ－２式にあてはまる。

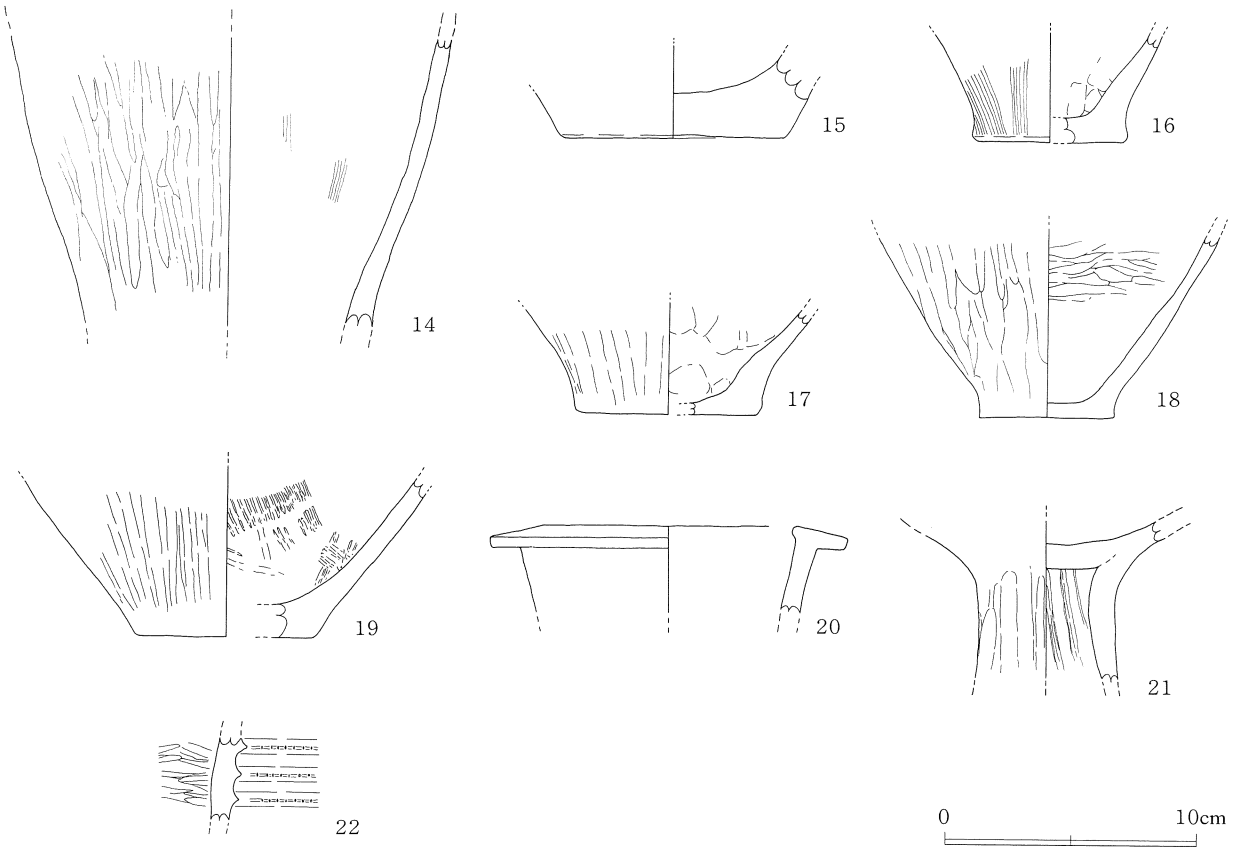
13、14は甕形土器の胴部である。13は内面に細かいハケ目と横方向のヘラ書きが施されている。14は外面は全面的にミガキ、内面は部分的にハケ調整である。

15から19は壷・甕形土器の底部である。15は全体的に厚く、他の４つに比べてやや古い感じを受ける。15は外面はナデ、内面は風化が激しい。16は外面はハケ目、17から19はミガキ調整である。

20は器種不明である。口縁部が北部九州の須玖Ⅱ式に類似しているとの記載がある。（註３）内外面ともナデ調整である。21は高坏の接合部である。円盤充填法でつくり、丁寧なミガキが施されている。22は長頸壷の頸部で、外面に細かい装飾、内面には丁寧なミガキが施されている。



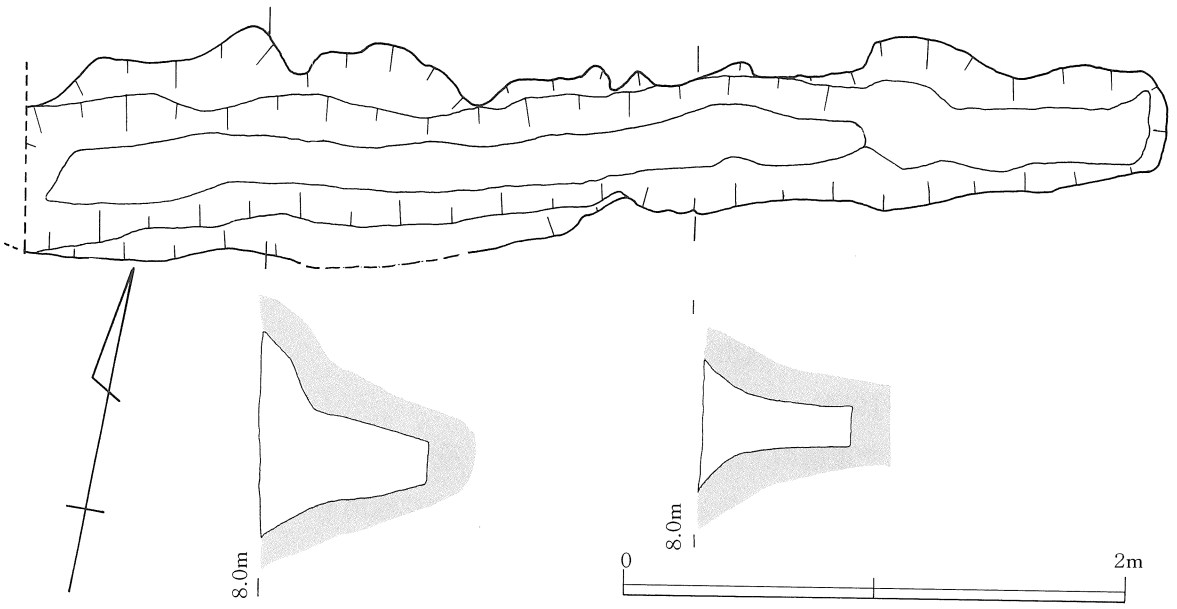
第6図　SK03出土遺物実測図（1）



第6図　SK03出土遺物実測図(2)

〈ＳＤ０１〉（第７図）

幅0.7m、現存長5.9mで、深さ66.0cmである。この遺構は西側に向かってまだ続いており、西側壁で確認した土層にもそれが現れている。遺構内部は包含層である黒褐色土のみであったが、遺物は検出されなかった。



第7図　SD01実測図

〈Ｐ１〉（第８図）

直径25㎝、深さ7.5㎝で、ほぼ円形を呈している。

〈ＳＫ０４〉（第８図）

東西0.75ｍ、南北0.7ｍ、深さ9.0㎝の不整形な円形を呈している。遺構の掘り込みは浅い。内部には黒褐色土が堆積していた。

〈ＳＫ０５〉（第８図）

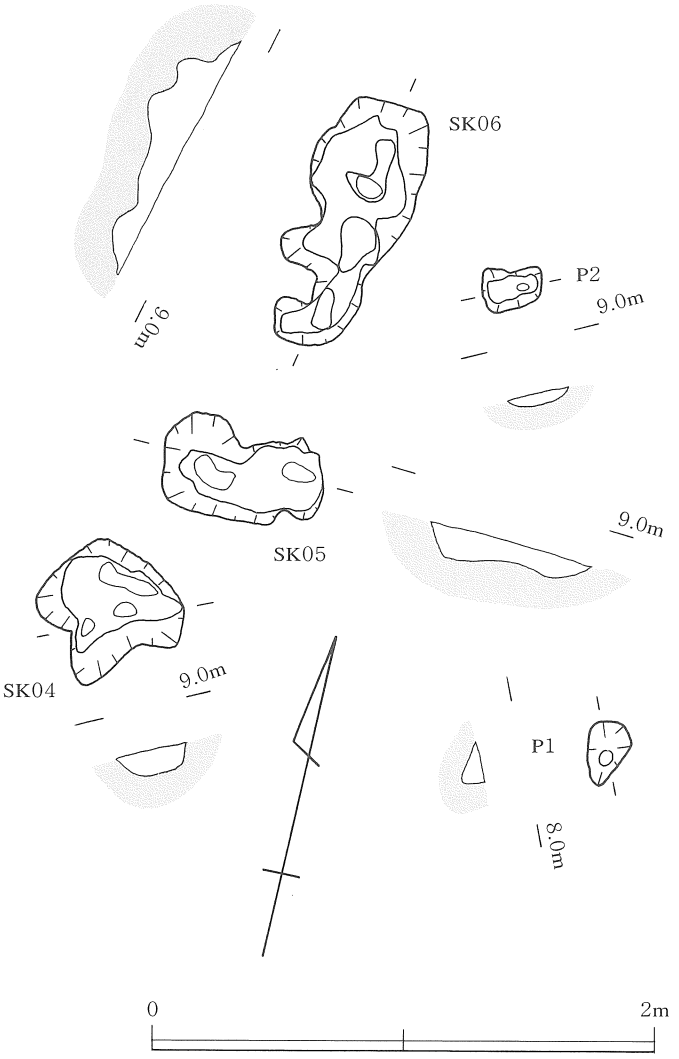
東西0.8ｍ、南北0.4ｍ、深さ11.4㎝の楕円形である。遺構の掘り込みは浅い。内部には黒褐色土が堆積していた。

〈ＳＫ０６〉（第８図）

東西0.5ｍ、南北1.25ｍ、深さ20.1㎝の不整形な楕円形である。内部は北より深く、南に行くに従って浅くなる。黒褐色土が堆積していた。

〈Ｐ２〉（第８図）

直径30㎝、深さ3.6㎝で、やや東西に伸びる楕円形を呈している。黒褐色土が堆積していた。



第8図　SK04・05・06・P1・P2実測図

〈ＳＫ０７〉（第９図）

東西0.55ｍ、南北1.45ｍ、深さ12㎝で楕円形を呈している。中央がやや深く、南北に向かってやや浅くなっている。

〈ＳＫ０８〉（第９図）

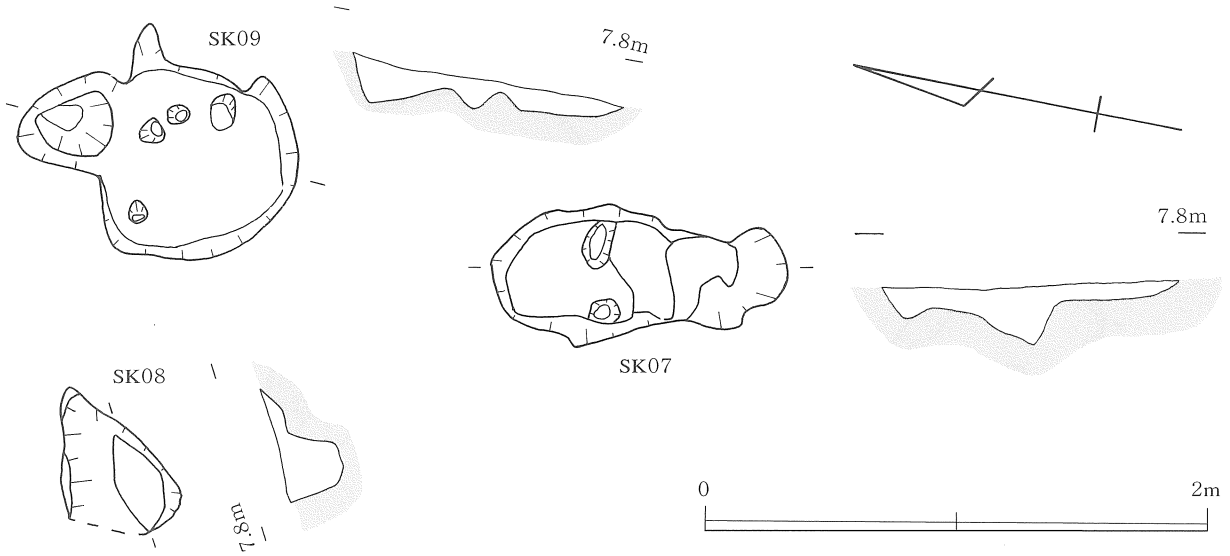
東西が現存で0.65ｍ、南北0.55ｍ、深さ12.3㎝である。他の遺構に比べてかなり深く、しっかりと掘り込まれている。小型の高坏が１点出土している。

〈ＳＫ０８出土遺物〉（第10図）

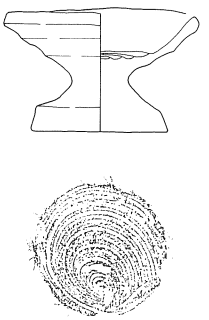
小型の高坏で、ほぼ完形で遺構の上面近くから出土した。全体はナデで仕上げられ、丁寧な作りとなっている。底部には糸切り痕が見られる。時期としては12世紀頃のものと思われる。

〈ＳＫ０９〉（第９図）

東西2.0ｍ、南北1.35ｍ、深さ8.9㎝で、北側部分が大きく突出している。かなり浅く、突出した部分はやや深くなっている。



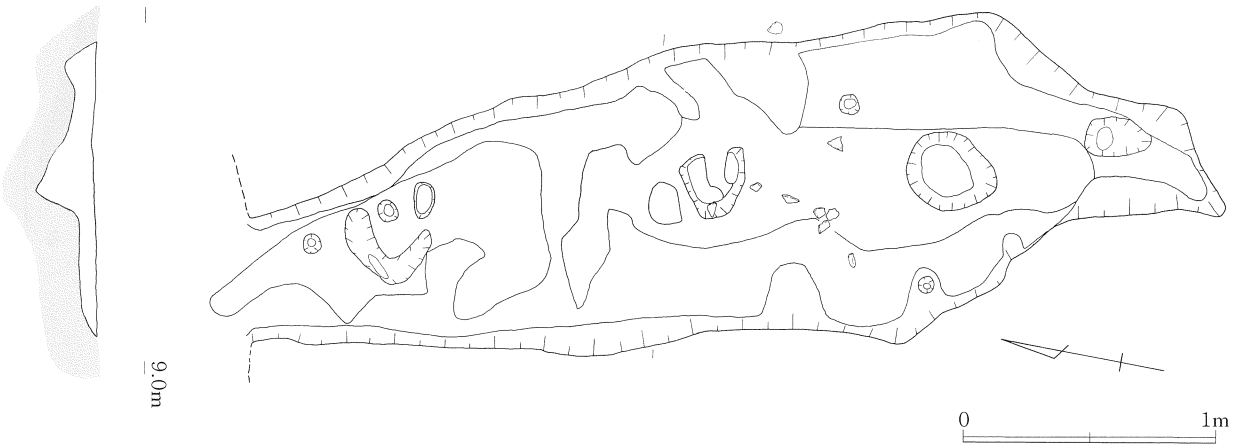
第9図　SK07・08・09実測図



〈ＳＤ０２〉（第11図）

東西1.4m、南北が現存長4.65m、深さ22.5cmである。北端がＳＫ１０、１１とくっついている。溝状遺構でもＳＤ０１と違ってかなり浅い。土器片が出土しており、弥生時代中期のものである。

第10図　SK08出土遺物実測図



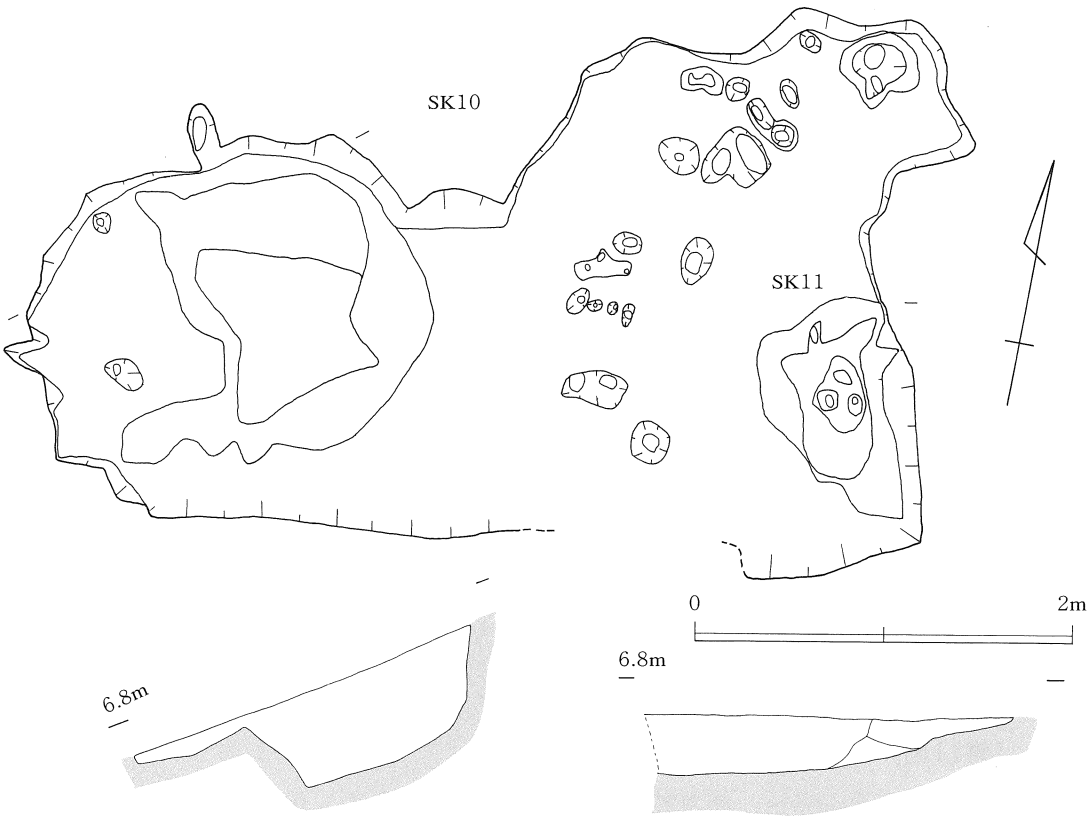
第11図　SD02実測図

〈ＳＫ１０、１１〉（第12図）

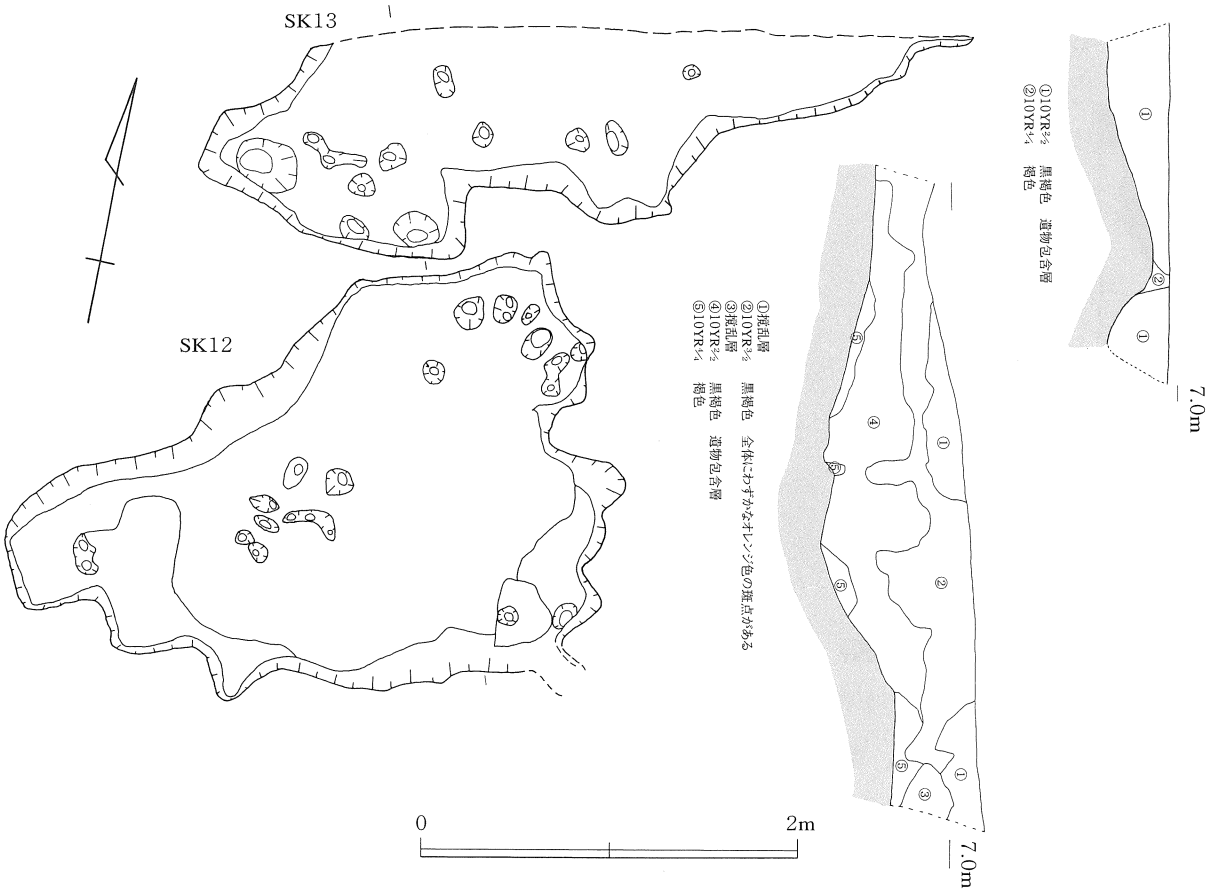
ＳＫ１０の西側とＳＫ１１の東側でくっついている。ＳＫ１０は南北3.75m、深さ30.4cm、１１は南北2.5m、深さ50.2cmで、東西は２つ合わせて5.6mである。恐らく、ＳＫ１１、ＳＤ０２が作られた後、より深く掘り込んでＳＫ１０が作られたと考えられる。

〈ＳＫ１２〉（第13図）

東西3.85m、南北2.7m、深さ79.2cmである。内部は西側に向かってやや下がっている。



第12図　SK10・11実測図



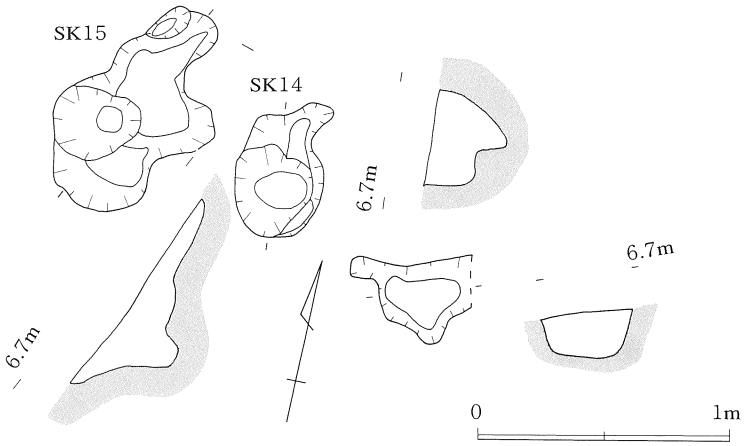
第13図　SK12・13実測図

〈ＳＫ１３〉（第13図）

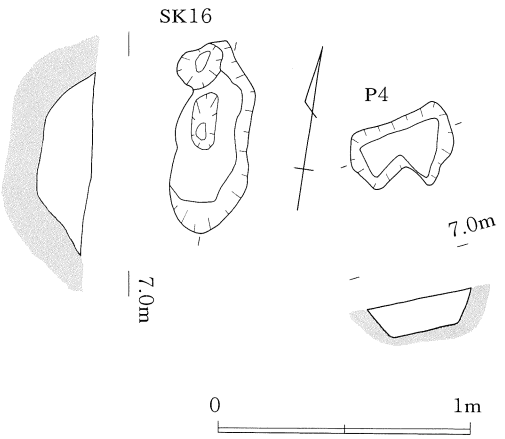
東西4.2m、南北は現存長1.5m、深さ32.6cmである。ＳＫ１２と同じように西側に向かってやや下がっているが、全体的に浅い。

〈ＳＫ１４、１５、Ｐ３〉（第14図）

規模は、それぞれＳＫ１４が東西0.8m、南北1.1m、深さ25.8cm、ＳＫ１５は東西が0.4m、南北0.6m、深さ29.0cm、Ｐ３は直径0.4m、深さ18.2cmで、どれもやや不整形である。遺構の掘り込みはどれも浅い。



第14図　SK14・15・P3実測図



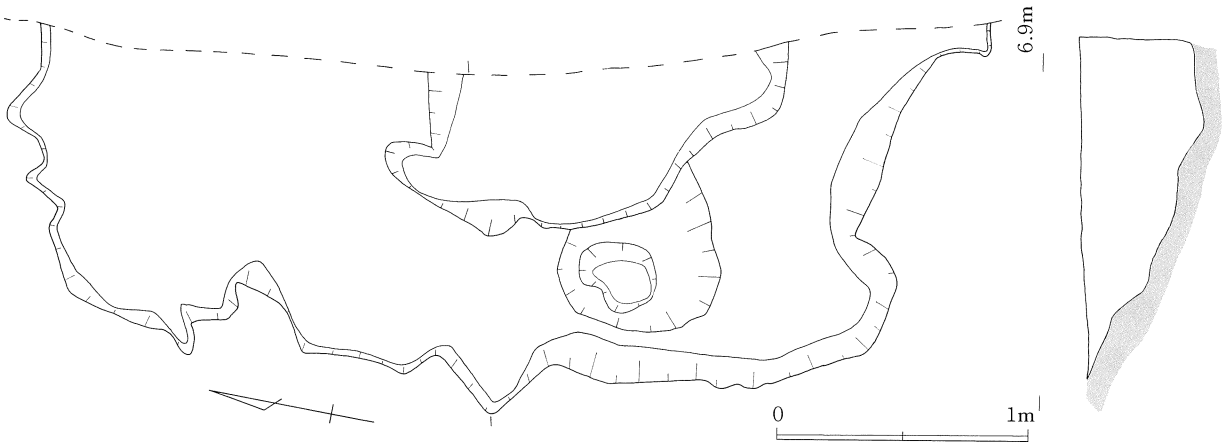
第15図　SK16・P4実測図

〈ＳＫ１６、Ｐ４〉（第15図）

規模は、ＳＫ１６が東西0.35m、南北0.95m、深さ20.3cm、Ｐ４が直径0.5m、深さ13.0cmで、どちらも楕円形を呈している。ＳＫ１６は他の遺構に比べるとかなりしっかりと掘り込まれている。

〈ＳＫ１７〉（第16図）

東西が現存長1.75m、南北4.7m、深さ48.2cmで、もっとも大きい土壙である。東の調査区の壁に向かってだんだんと深くなっており、壁際は部分的に深くなっている。



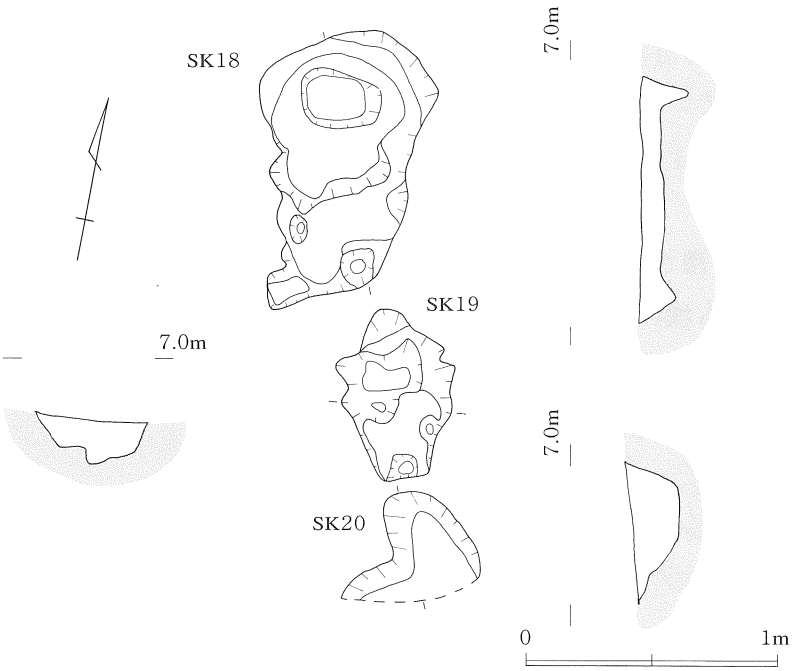
第16図　SK17実測図

〈ＳＫ１８〉（第１７図）

東西が0.65ｍ、南北は1.3ｍ、深さ9.1㎝である。中央部分が深くなっているため、ＳＫ０１によって掘り込まれているものの、弥生時代のものと思われるＳＫ１８はほとんど壊されていなかった。

〈ＳＫ１９、２０〉（第17図）

ＳＫ１９は東西０.５５ｍ、南北０.８５ｍ、深さ17.1㎝でＳＫ２０は東西が0.5ｍ、南北が現存長０.５５ｍ、深さが２０.６㎝である。ＳＫ１８、１９、２０は割としっかりと掘り込まれている。



第17図　SK18・19・20実測図

（３）遺物（遺構外出土）

今回の調査では、包含層やすでに撹乱を受けた場所など、遺構に伴わない遺物も多く出土している。その中から、比較的状態のよいものをここに挙げたい。

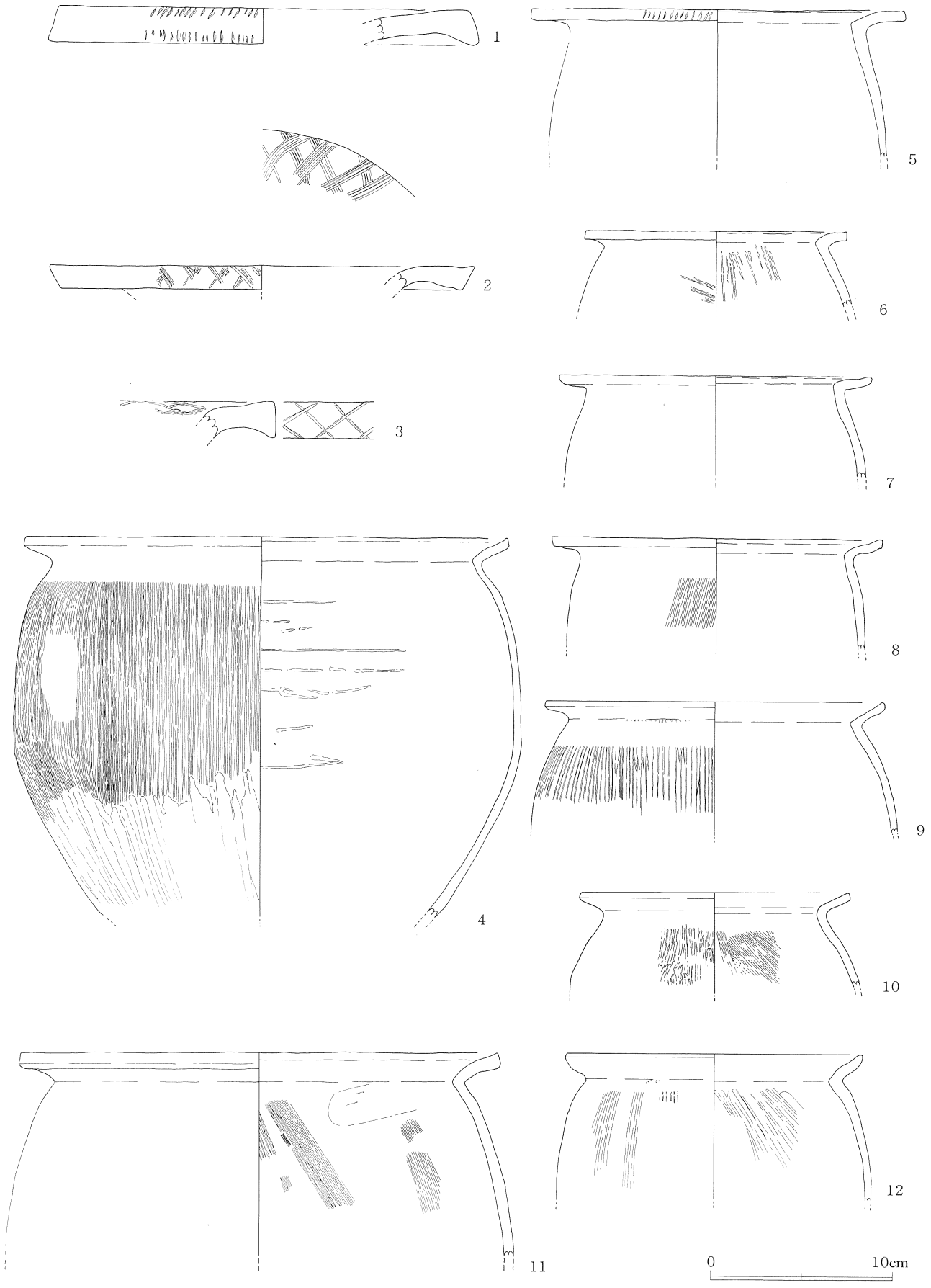
弥生土器（第18図１）

第18図１は甕の口縁部及び胴部である。１から３は大きく外反し、細かい装飾が施されている。１は外面に刺突文、２、３は外反した口縁部の内面にも外面と同じような斜格子文が施されている。４から１は甕の口縁部から胴部にかけてである。４は口縁部がくの字に屈曲し、外面は胴部の上半分がハケ目、下半分はミガキで調整されている。また、内部は横方向のミガキが部分的に施されている。５から８は口縁部の屈曲が強く、水平方向に開いている。５は口縁部外面に刺突文が施されている。６は内外面が粗いハケ目で調整されている。７は内外面とも丁寧なナデ仕上げである。８は口縁部の屈曲がやや弱くなっている。外面はハケ調整である。

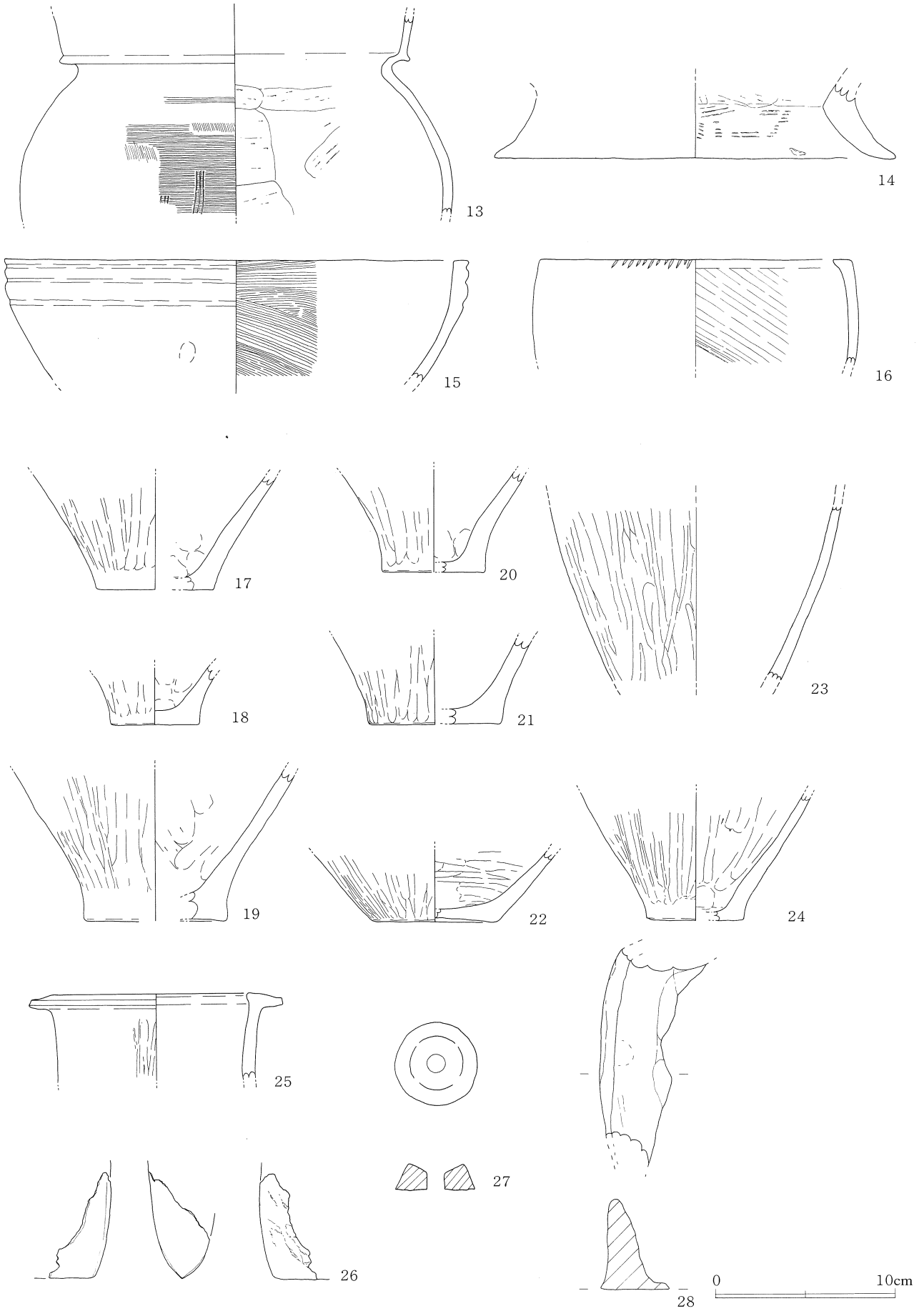
９から１４は口縁部がやや斜め上に立ち上がっている。９は外面に粗いハケ目を施しているが、頸部の境目に工具痕が残っており、恐らく頸部からハケ目を施した後、一部をナデ消したものと考えられる。１０も内外面ともにハケ目調整されている。１１は口縁部外面にやや幅を持っている。外面はナデ、内面はハケ調整である。１２は口縁部の端部が先細りしている。外面は細かいハケ、内面は粗いハケ調整である。いずれも松本編年のⅢ－１式から２式に該当するものである。

弥生土器（第18図２）

１３は弥生時代終わりから古墳時代にかけてのものである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。外面は細かいハケ、内面は頸部までのケズリで調整されている。全体的に器壁が薄い。１４は脚部で



第18図　遺構外遺物実測図（弥生土器 他　1）

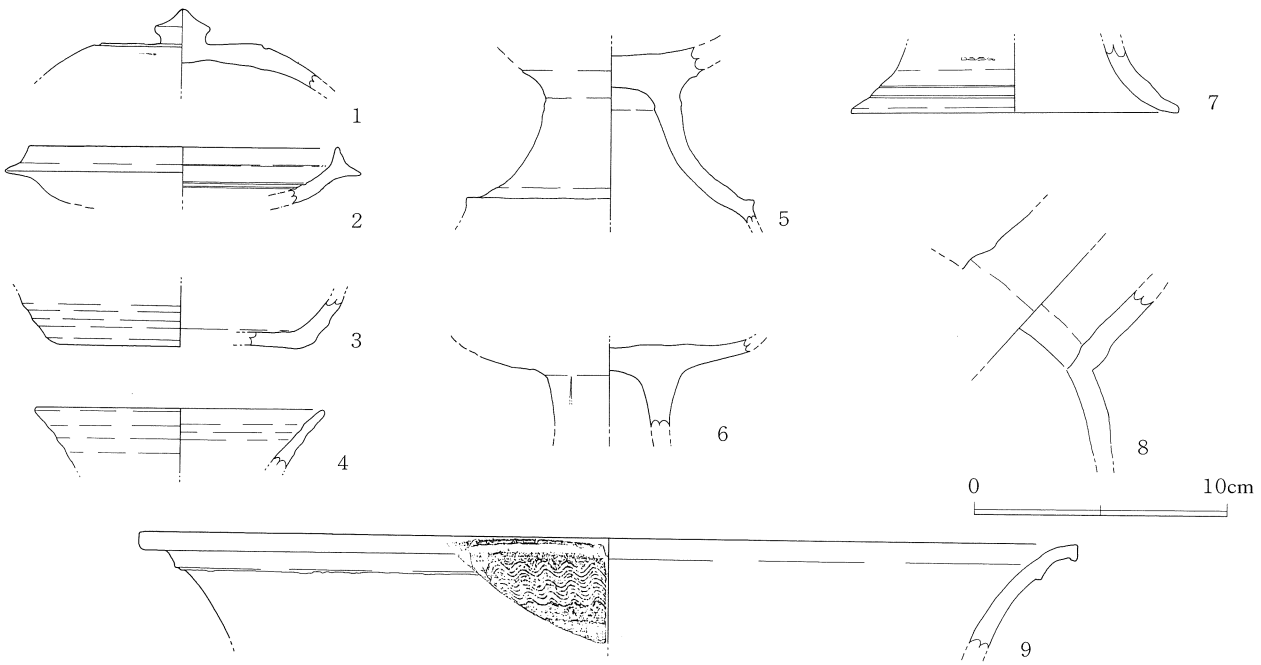


第18図　遺構外遺物実測図（弥生土器 他　2）

ある。外面はナデ、内面は端部はナデ、屈曲部まではハケ、屈曲部より上はケズリが施されている。器種は不明である。１５、１６は鉢である。１５は外面はナデ、内面は細かいハケ目調整である。

１６は１５よりも古く、口縁部にやや幅を持つものとなっている。口縁端部に刺突文が施されている。内面はかなり幅のあるハケ目調整である。１７から２４は甕の底部である。１７から２１、２４は底部からやや湾曲して胴部へと広がっている。いずれも外面はミガキ、内面は指頭圧痕が残るナデ調整が施されている。２２は底部からそのまま胴部に向かって膨らむように広がっている。底部中央はやや凹面状になっている。外面は縦方向、内面は横方向のミガキである。２３は胴部のみであり、詳しいことはわからないが、比較的器壁が薄い。外面はミガキ調整されている。２４は外面にミガキが施されているが、底部付近はさらにナデ調整がなされている。

２５は口縁部であるが器種不明である。口縁端部は他に見られないもので、今回の出土遺物の中でもこれ１点のみである。２６は磨製石斧である。２７は紡錘車である。下部分は多少剥離している。２８は竈の庇部分が剥離したものである。



第19図　遺構外遺物実測図（須恵器）

須恵器　（第19図１，２）

須恵器は９点出土している。１は宝珠状ツマミを持つ坏蓋である。外面はケズリ、内面はナデ調整である。外面上部に１条の線がある。２は坏身で、口縁の立ち上がりは小さく、受け部はやや下に向かって広がっている。内面に２条の線がある。３も同じく坏身で、２よりも後出のものである。４は口縁部で、恐らく長頸壷のようなものと考えられる。器壁は薄い。５、６は高坏である。５は接合部から脚部にかけてで、透かしなどは確認できなかった。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。６は接合部である。三角形の透かしの切り込みが残っており、内外面ともナデ仕上げである。７は脚端部で

あるが、詳しい器種は判別できない。恐らくこれも高坏であろうと思われる。外面に櫛状工具での刺突文が確認できる。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。８は器種不明であるが、何らかの接合部である。内外面のナデ調整痕からこのような角度になると考えられる。９は大甕の口縁部である。外面に10条の波状文が施されている。いずれも時期としては出雲５期から６期頃に該当すると考えられる。（註４）

土師器　（第20図）

土師器は主立ったもので19点出土しており、その全てが埦、皿の類である。１から１１が椀（もしくは小型の皿）１２から１９が小型の皿である。

１は埦の底部である。底面には糸切り跡がはっきりと残っている。内外面とも丁寧なで仕上げである。２は、底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部付近でやや湾曲する。底部は風化して糸切り痕は見えないが、その他の部分は丁寧なナデが施されている。内面は強くナデたため、指の跡でやや湾曲している。３は底部から斜め上方に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。底部には糸切り痕が残る。これら３つは９世紀の終わり頃から10世紀にかけてのものと考えられる。（註５）

４は、底部のみ残存しているが、立ち上がりは丸く湾曲している。糸切り痕が残る。５も同じように丸く湾曲して立ち上がっている。６は前述の２点と同じく丸く湾曲して立ち上がっているが、口縁端部で外反している。高台が付いていた痕跡がある。７は底部から丸く立ち上がって、口縁部まで真っ直ぐに続いている。内外面とも凹凸が少なく、丁寧に仕上げられている。８は底部のみであるが、同じく丁寧にナデ仕上げとなっている、以上５点のうち、４から６は12世紀、７、８はそれよりも少し後出であると考えられる。

９は前述のものと同じく底部から丸く湾曲して立ち上がっている。底部内面に渦巻き状の溝がある。

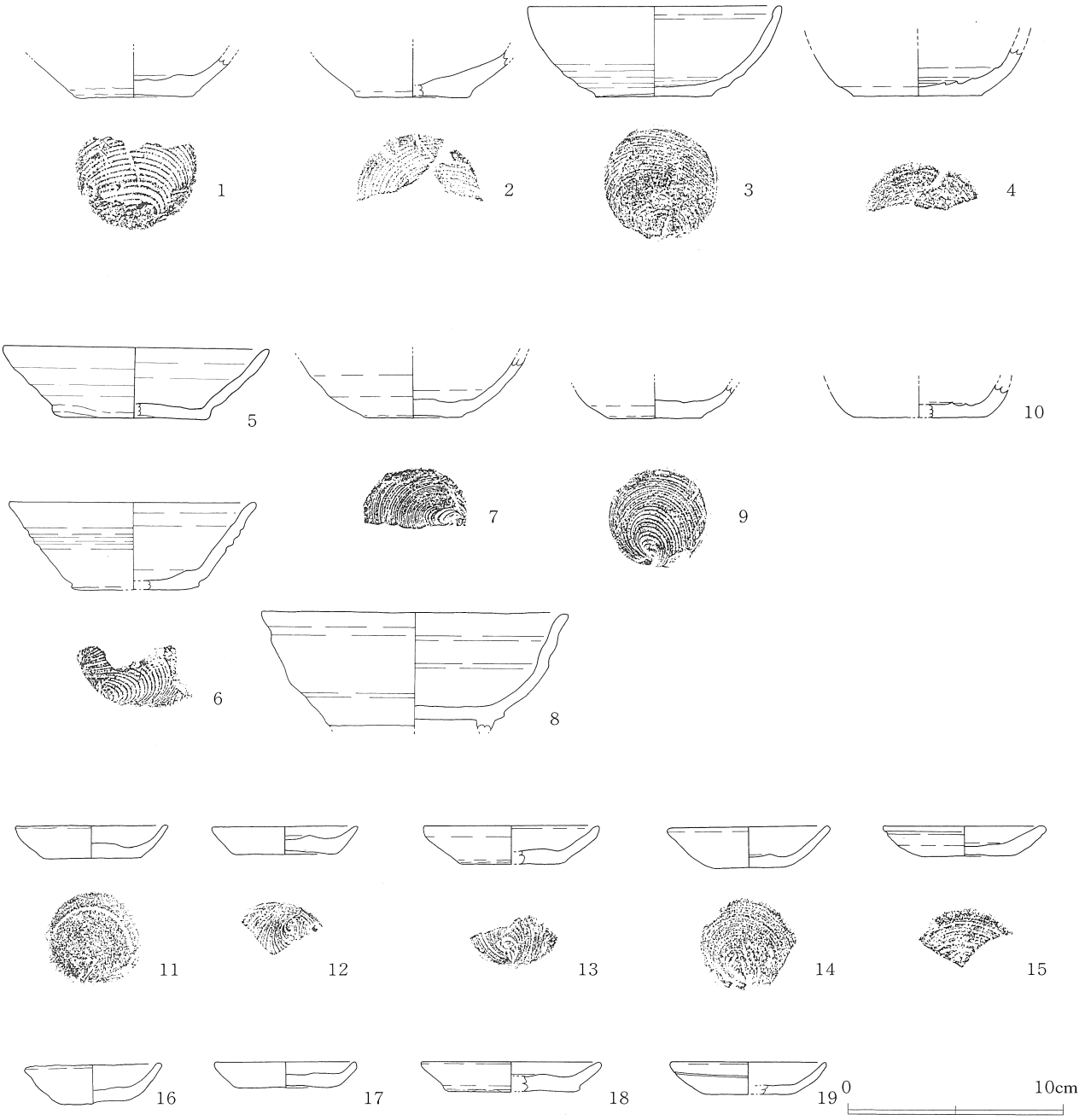
１０は底部の平坦面が大きく、立ち上がりもそれほど丸く湾曲していない。１０は底部内面に９と同じく渦巻き状の溝がある。以上３点は13から14世紀のものと考えられる。

小型の皿は９点出土している。１１は底部に糸切り痕が確認できるものの、やや摩滅している、底部内面の中央がやや高くなっている。底部から小さく湾曲し、立ち上がっている。１２は底部から真っ直ぐに立ち上がっている。底部内面は中央がくぼんでその周囲を取り囲むように高くなっている。１３は真っ直ぐ立ち上がって、口縁部付近で屈曲している。底部内面は中央がやや高くなっている。１４は真っ直ぐ立ち上がっていて、他のものよりも器壁が薄い。底部内面中央がくぼんでいる。１５は立ち上がりが小さく、やや湾曲している。他のものに比べて器壁が厚い。

１６は外面にナデによる湾曲があり、口縁端部との境界がはっきりとしている。１７は短く真っ直ぐに立ち上がる。１８は底部から直立し、外反するように立ち上がっている。器壁はやや厚い。１９は湾曲しながら立ち上がる。外面には一条の線が描かれている。これらの小型の皿は12世紀もので、やや後出すると思われる１２は13世紀にかかる可能性もある。（註６、７）

（４）小結

今回の調査では、遺構のほとんどが破壊されていた上、遺物が限られた遺構からしか出土しなかっ



第20図　遺構外遺物実測図（土師器 他）

たため断定するのはいささか不安であるが、確認された遺構は弥生時代中期から後期にかけてのものと考えられる。ＳＫ０１については全くの不明であり、ＳＫ０８については共伴遺物が中世頃のものであったが、遺構面は他の弥生時代中期のものと同じであることから、弥生時代中期頃の遺構と考えた方が無難であろう。

共伴遺物のあったＳＫ０２、０３についてであるが、ＳＫ０３は大量の遺物を伴っていたこと、また遺物とともに不自然な状態で石が出土したことから、土壙墓であったと考えられる。ＳＫ０２も断定はできないが、ＳＫ０３と状況がよく似ていることからこれも土壙墓である可能性がある。

ＳＤ０１はその位置から、ＳＫ０２、０３という土壙墓とその他の遺構を区画する性格のものであ

ると考えられる。

昭和60年に行われた第５次調査地の隣接地ということで、方形周溝墓や竪穴式住居の存在も考えられたが、検出された遺構の性格までを把握するのは今回の出土資料だけでは不可能であった。しかし、出土資料の時期を考えれば、第５次調査の際出土した遺物との時期はそれほどの開きはないため、今後周辺の調査が進んだ段階でその関係も明らかになるであろう。

註

（１）出雲市教育委員会　『天神遺跡発掘調査Ⅳ』　1986年３月

（２）正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』　1992年５月

（３）　同上　Ｐ443　「口縁上面が平坦になり、「鋤形」あるいは「Ｔ」字形断面に発達したものである。」「北部九州の須玖Ⅱ式土器に類似している」

（４）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」　島根考古学会誌第11集　1996年

（５）武田恭彰「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」

（６）川原正人・桑原真治「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」　古文化談叢第18集　1987年

（７）広江耕史「島根県における中世土器について」　松江考古第８号　1992年12月

土器観察表

挿図番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
4－1	壷	24.4	－	－	外／ナデ 口縁内部、端部に斜格子文	外／橙褐色 内／褐色	やや粗 微砂粒	良	
4－2	甕	26.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／黄橙色 内／淡黄橙色	やや密 微砂粒わずか	やや良	
4－3	甕	17.6	－	－	外／縦ハケ 内／ナデ	外／淡褐色 内／灰褐色	やや密 微砂粒多い	やや良	
6－1	甕	23.2	－	－	外／ナデ 内／斜ハケ	外／橙褐色 内／暗褐色	やや粗 微砂粒	良	
6－2	甕	15.8	－	－	外／斜ハケ 内／斜ハケ	外／淡黄褐色 内／淡褐色	密	良	
6－3	甕	17.2	－	－	外／縦ハケ 内／斜ハケ	外／暗灰褐色 内／淡褐色	密	やや良	
6－4	甕	24.2	8.4	27.0	外／縦ハケ 底部付近ミガキ 内／１部ハケ	外／淡褐色 内／黒褐色	やや粗 微砂粒・小石	やや良	
6－5	甕	18.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ	褐色	やや粗 小石わずか	やや良	
6－6	甕	18.4	－	－	外／縦ミガキ 内／ナデ	外／明褐色 内／褐色	やや粗 微砂粒わずか	やや良	
6－7	甕	18.6	－	－	外／斜ハケ 内／斜ハケ	黄橙色	やや密 微砂粒	良	
6－8	甕	16.2	－	－	外／粗いミガキ 内／ナデ	淡褐色	やや密 微砂粒	やや良	内面に指頭圧痕

挿図番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
6－9	甕	15.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／黄橙色 内／淡橙色	やや粗 微砂粒多い	良	
6－10	甕	14.2	－	－	外／縦ハケ 内／斜ハケ	淡褐色	やや粗 微砂粒	やや良	
6－11	甕	19.0	－	－	口縁部内外ナデ 頸部内面ケズリ	外／淡褐色 内／淡黄褐色	やや粗 砂粒多い	やや良	端部に格子文
6－12	甕	18.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／黄褐色 内／淡褐色	やや粗 微砂粒多い	良	
6－13	甕	－	－	－	外／斜ハケ 内／斜ハケ のち横ミガキ	外／暗褐色 内／橙褐色	密	やや良	部分片
6－14	甕	－	－	－	外／縦ミガキ 内／ナデ	外／暗褐色 内／暗灰褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	内面指頭圧痕
6－15	甕	－	8.8	－	外／ナデ 内／ナデ	外／橙色 内／黄橙色	やや粗 微砂粒	やや軟	内面やや風化
6－16	甕	－	5.8	－	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	外／黒灰色 内／灰色	やや粗 砂粒多い	やや軟	
6－17	甕	－	7.0	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	外／暗褐色 内／暗灰褐色	粗 微砂粒・小石	やや良	内面指頭圧痕
6－18	甕	－	5.4	－	外／縦ミガキ 内／横ミガキ、 底部ナデ	外／暗褐色 内／淡褐色	粗 微砂粒・小石	やや軟	
6－19	甕	－	6.8	－	外／縦ミガキ 内／ハケ 底／ナデ	外／淡橙色 内／黄褐色	やや粗 微砂粒	やや良	

挿図番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
		口径	底径	器高					
6－20	壷？	10.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗褐色 内／明褐色	やや粗 砂粒多い	やや良	須玖Ⅱ式？
6－21	高坏？	－	－	－	外／縦ミガキ 坏部／ナデ	明褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	
6－22	壷頸部？	－	－	－	外／ナデ、突帯に刺突文 内／横ミガキ	明褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	部分片
10	小型高坏	7.4	5.4	4.9	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	淡橙褐色	やや粗	やや軟	
18－1	甕	22.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ 端部に刺突文	明褐色	粗 砂粒多い	やや軟	
18－2	甕	23.6	－	－	外／ナデ 内・端部／斜格子文	淡褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	
18－3	甕	－	－	－	外／ナデ 内・端部／斜格子文	明褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	
18－4	甕	37.0	－	－	外／縦ハケ、底付近ミガキ 内／ナデ	橙褐色 外面は黒く変色	やや粗 微砂粒多い	良	
18－5	甕	20.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／淡褐色 内／淡灰褐色	やや粗 砂粒多い	やや軟	
18－6	甕	14.4	－	－	外／ナデ 内／斜ハケ	暗褐色	密	良	
18－7	甕	17.2	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗灰褐色 内／褐色	やや密 微砂粒	良	

挿図番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
18－8	甕	18.2	－	－	外／縦ハケ 内／ナデ	暗灰褐色	やや粗 微砂粒多い	良	
18－9	甕	18.6	－	－	外／縦ハケ 内／ナデ	外／黒く変色 内／暗橙褐色	やや密 微砂粒	良	
18－10	甕	14.8	－	－	外／縦ハケ 内／ナデ	外／淡黄橙色 内／淡橙色	密	やや軟	
18－11	甕	26.2	－	－	外／ナデ 内／部分的に斜ハケ	外／淡褐色 内／暗褐色	やや密	やや軟	
18－12	甕	16.4	－	－	外／縦ハケ 内／斜ハケ	淡褐色	やや密 砂粒わずか	やや軟	
18－13	甕	－	－	－	外／横ハケ 内／ナデ、頸部以下ケズリ	外／淡褐色 内／明褐色	やや粗 砂粒多い	やや良	
18－14	脚部	－	22.4	－	外／粗いナデ 内／部分的に横ハケ	明褐色	やや密 微砂粒	やや軟	
18－15	鉢	25.8	－	－	外／ナデ 内／横ハケ	灰白色	密	やや良	外面に指頭圧痕
18－16	鉢	17.4	－	－	外／ナデ 内／斜ハケ	暗褐色	やや密 微砂粒	やや軟	口縁端部に刺突文
18－17	甕	6.4	－	－	外／縦ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／淡黄橙色	粗 砂粒多い	やや軟	
18－18	甕	4.8	－	－	外／ミガキ 内／ナデ	灰褐色	やや粗 微砂粒多い	良	内面に指頭圧痕

挿図番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
		口径	底径	器高					
18－19	甕	－	7.6	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	外／黒褐色 内／淡黄橙色	やや密 微砂粒	良	内面に指頭圧痕
18－20	甕	－	5.6	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	外／淡橙色 内／灰褐色	やや密 微砂粒	やや良	内面に指頭圧痕
18－21	甕	－	7.2	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	外／暗褐色 内／淡橙色	密	やや良	
18－22	甕	－	7.0	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	淡黄橙色	やや粗 砂粒多い	やや良	
18－23	甕	－	－	－	外／縦ミガキ 内／ナデ	外／淡褐色 内／暗褐色	やや粗 微砂粒多い	やや良	内面に指頭圧痕
18－24	甕	－	5.3	－	外／縦ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	外／暗黄橙色 内／淡赤褐色	粗 砂粒多い	やや良	
18－25	壷？	10.2	－	－	外／ナデ 内／ナデ	暗褐色	やや密 微砂粒	良	須玖Ⅱ式に類似？
18－26	磨製石斧	残存長 6.3	残存幅 2.5	－		－	－	－	
18－27	紡錘車	3.0	4.6	現存 1.9		淡褐色	密	やや軟	一部剥離
18－28	甕　庇	－	－	－	ナデ	淡褐色			
18－1	坏蓋	－	－	－	外／回転ケズリ 内／回転ナデ	暗灰色	やや密 微砂粒	良	外面に１条の沈線

挿図番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
		口径	底径	器高					
19－2	坏身	12.2	－	－	外／高温により劣化 内／ナデ	外／灰白色 内／灰色	密	やや良	
19－3	坏身	－	9.1	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切痕？	外／暗灰色 内／灰色	密	良	
19－4	長頸壺？	11.3	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗褐色	密	良	
19－5	高坏	－	－	－	脚部／内外面とも回転ナデ 坏部／ナデ	外／青灰色 内／灰色	やや密 微砂粒	良	
19－6	高坏	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	灰褐色	やや密 砂粒わずか	良	
19－7	高坏	－	13.0	－	外／回転ナデ 櫛状工具跡 内／回転ナデ	外／灰色 内／淡灰色	密	良	
19－8	頸部？	－	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	密	良	外面胴部高温で劣化
19－9	大甕	27.2	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	暗青灰色	密	良	外面に波状文
20－1	坏	－	5.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	明褐色	やや密 砂粒わずか	やや軟	
20－2	坏	－	5.3	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	黄橙色	密	やや良	
20－3	坏	11.8	5.4	4.2	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	淡褐色	やや密 微砂粒わずか	やや良	

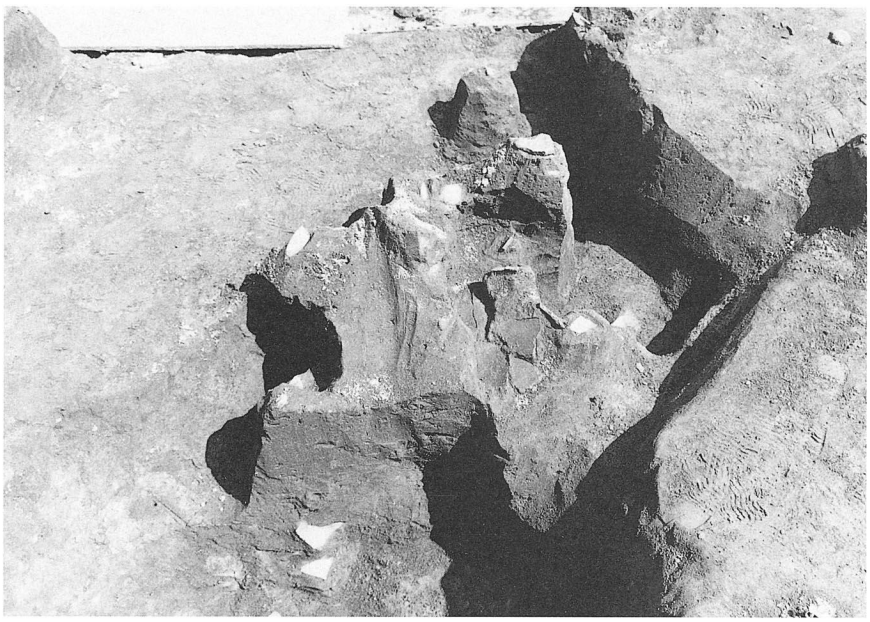
挿図番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
		口径	底径	器高					
20－4	坏	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	黄橙褐色	密	やや軟	
20－5	坏	12.4	6.9	3.3	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／ナデ	淡褐色	やや密 微砂粒わずか	やや良	
20－6	坏	11.4	5.8	4.1	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	外／褐色 内／明褐色	密	やや良	
20－7	坏	－	4.4	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	外／暗黄橙色 内／暗橙色	密	やや軟	
20－8	坏	14.3	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転ナデ	明褐色	やや密 微砂粒わずか	やや良	底部内面は粗いナデ
20－9	小皿	－	4.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	黄橙色	密	やや良	
20－10	小皿	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転ナデ	明褐色	やや密 微砂粒	やや良	
20－11	小皿	6.9	4.6	1.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	明褐色	密	軟	
20－12	小皿	6.8	4.8	1.3	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	外／淡橙色 内／淡黄橙色	やや密 微砂粒わずか	やや良	
20－13	小皿	8.2	5.0	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	淡黄橙色	密	やや良	
20－14	小皿	7.4	3.4	1.9	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	外／淡橙色 内／淡褐色	密	やや軟	

挿図番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
		口径	底径	器高					
20－15	小皿	7.3	4.3	1.4	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	橙色	やや密 微砂粒	やや軟	
20－16	小皿	6.0	3.5	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	暗褐色	密	やや良	
20－17	小皿	6.4	4.5	1.2	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	暗黄橙色	やや密 微砂粒わずか	やや軟	
20－18	小皿	8.2	5.8	1.4	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	淡橙褐色	やや密 微砂粒わずか	やや良	
20－19	小皿	7.2	4.0	1.5	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切	橙褐色	密	やや軟	外面に１条の沈線

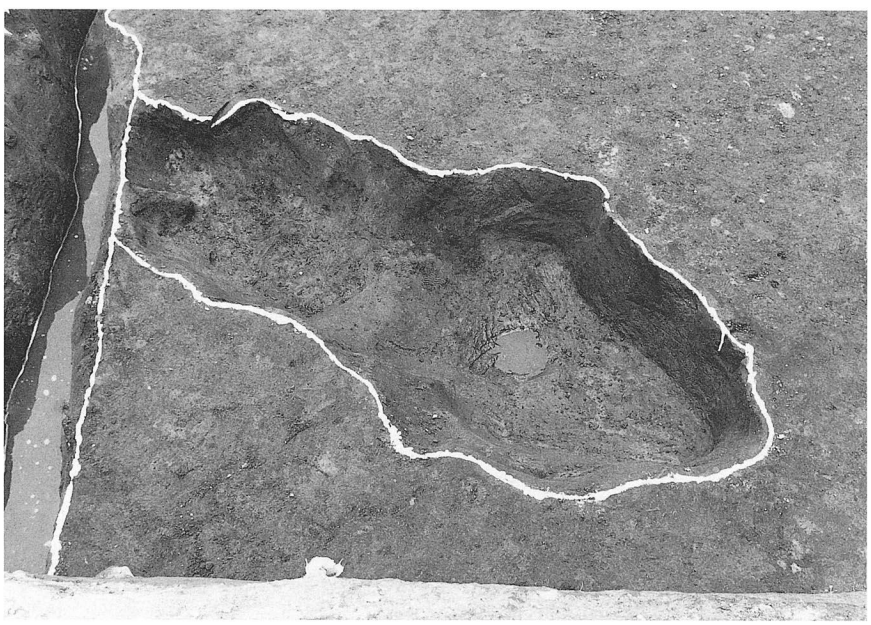
図　　版

図版1

全景



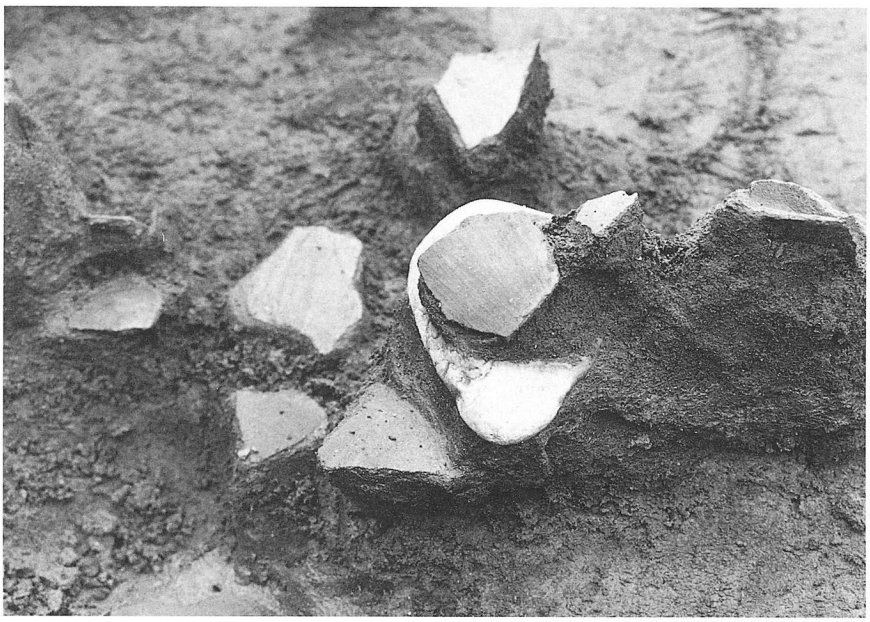
SK02
遺物出土状況



SK02

図版2

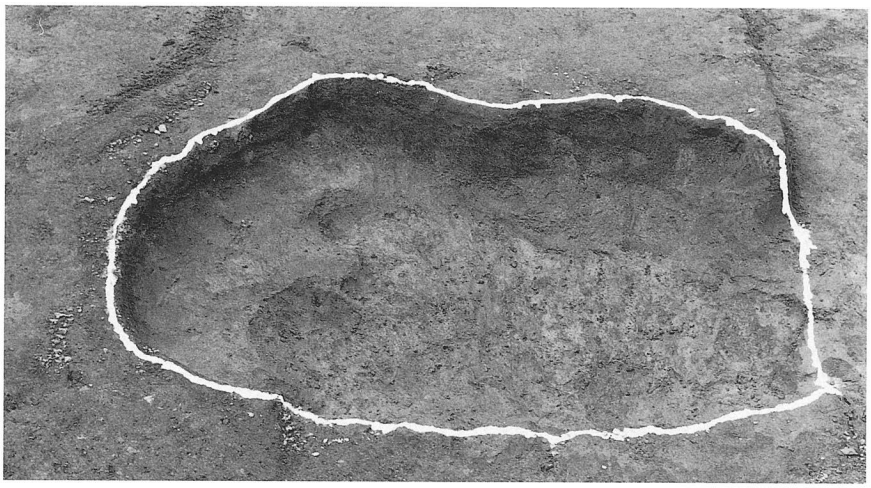
SK03
遺物出土状況



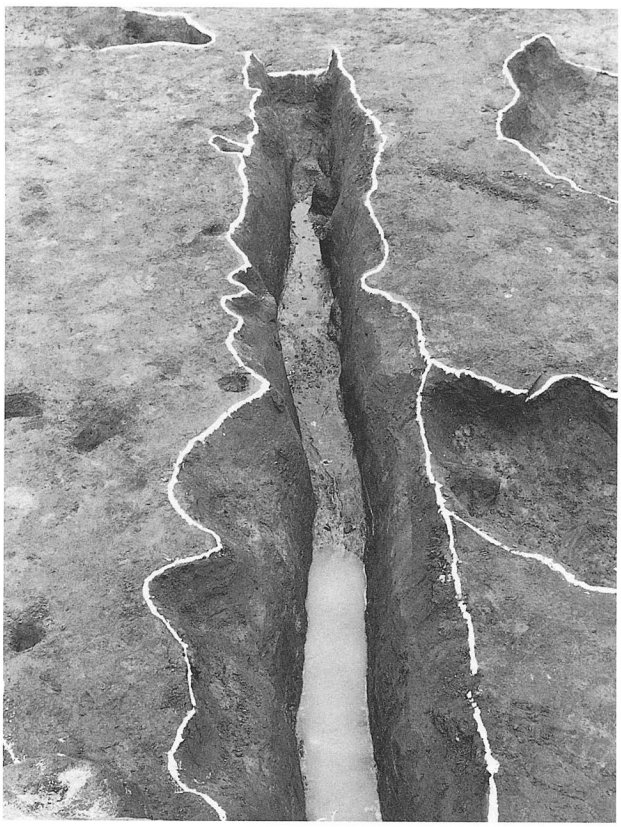
SK03
石·遺物検出状況

SK03
石検出状況

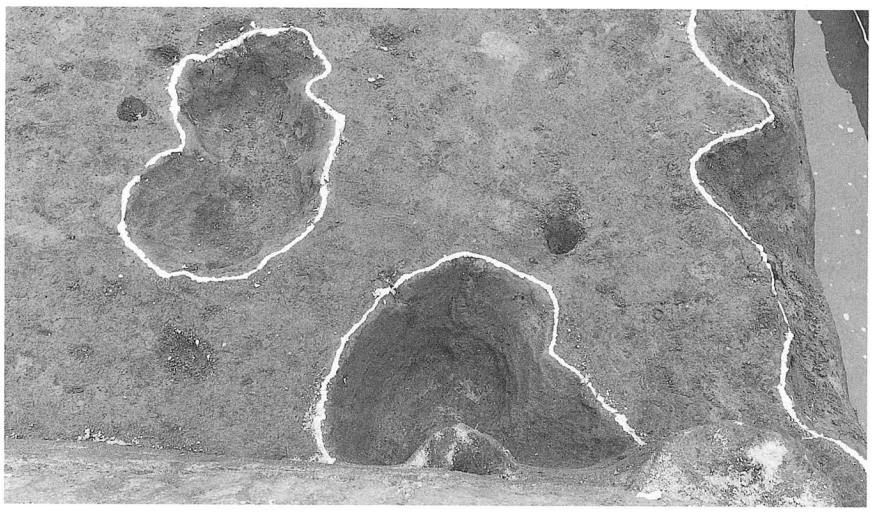
図版3



SK03

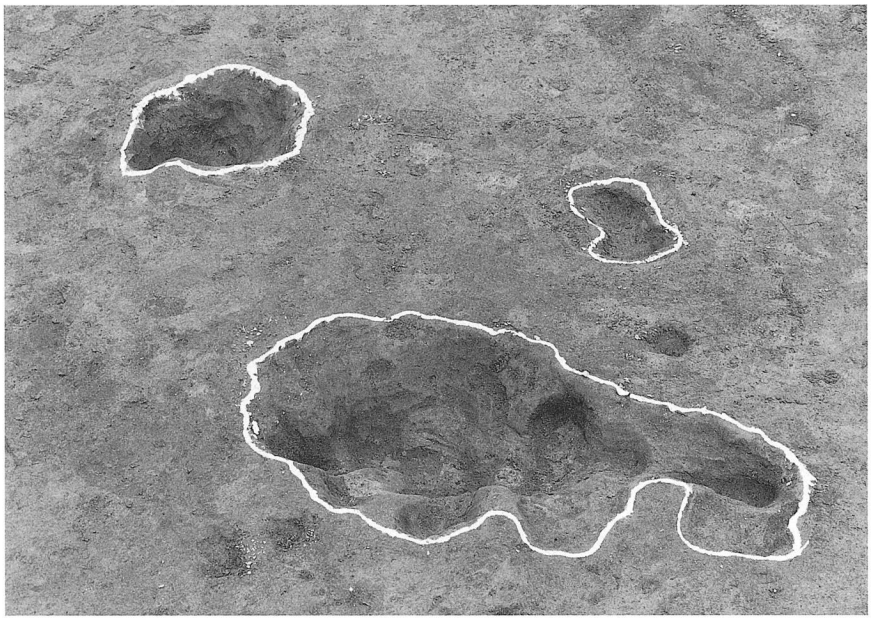


SD01

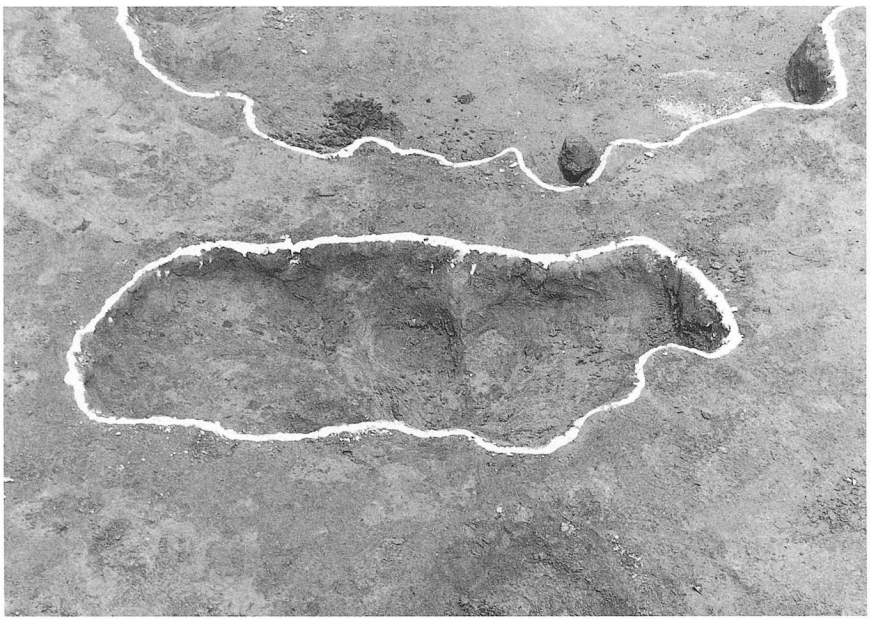


SK04・05

図版4



SK06・P2



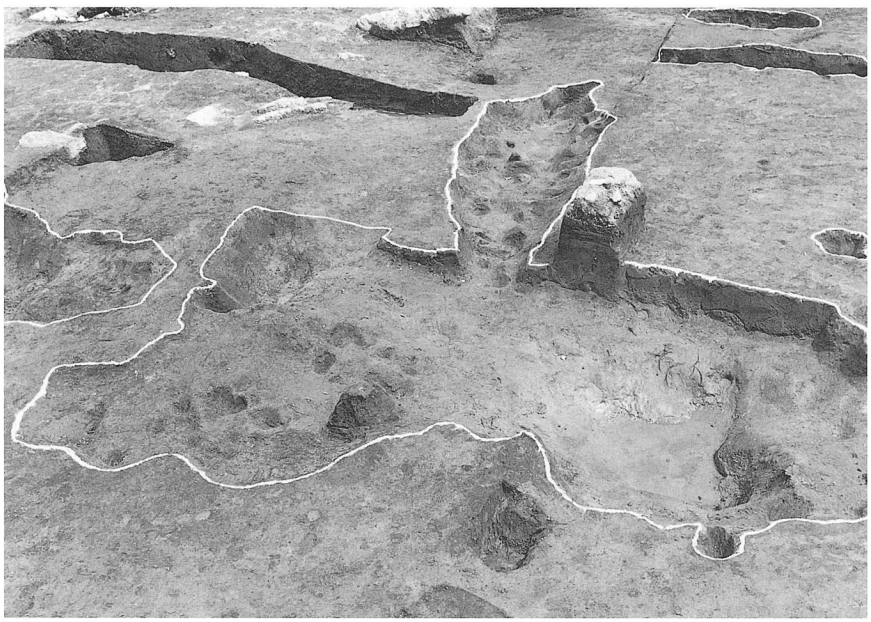
SK07

SK08
遺物出土状況

図版5

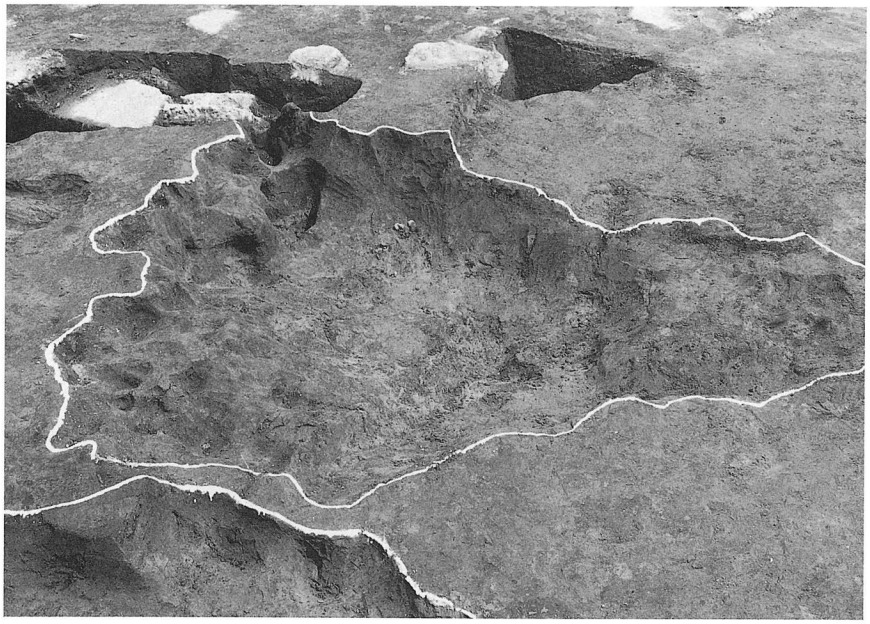
SK08

SK09



SD02
SK10・11

図版6

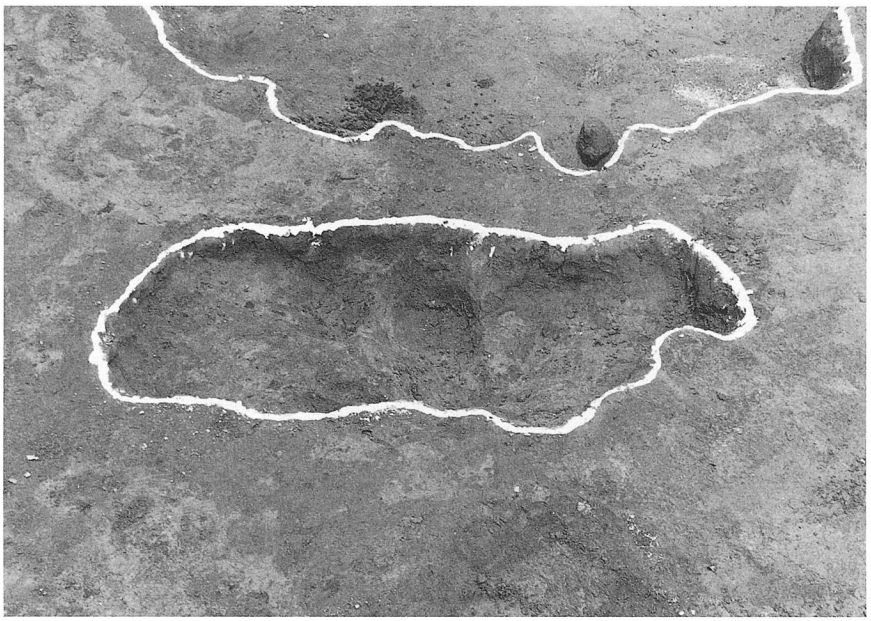


SK12

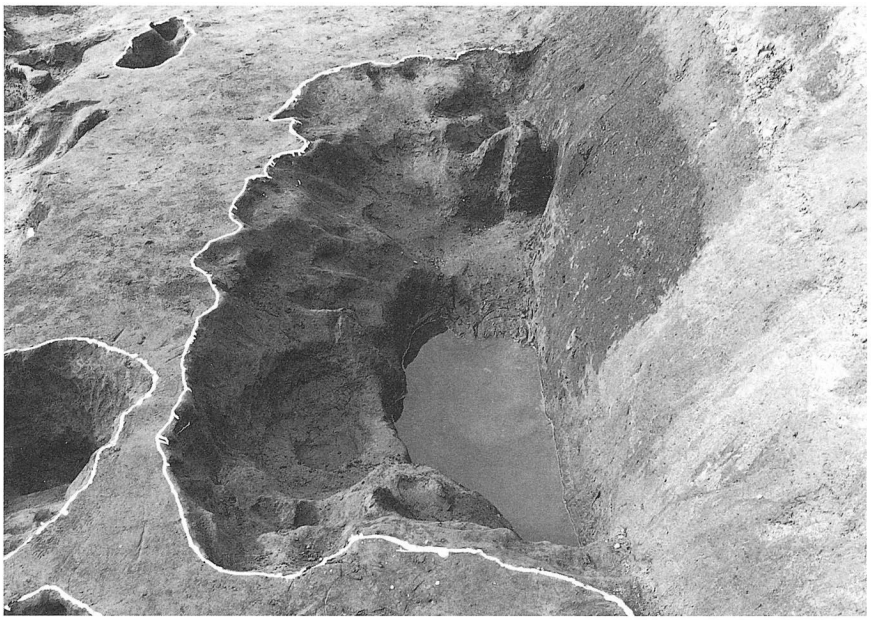
SK13

SK14・15
P3

図版7



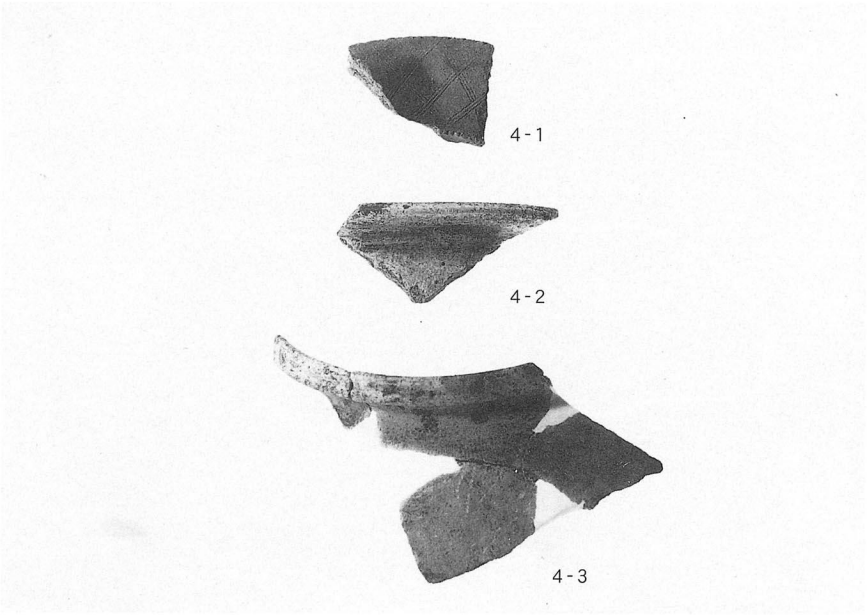
SK16



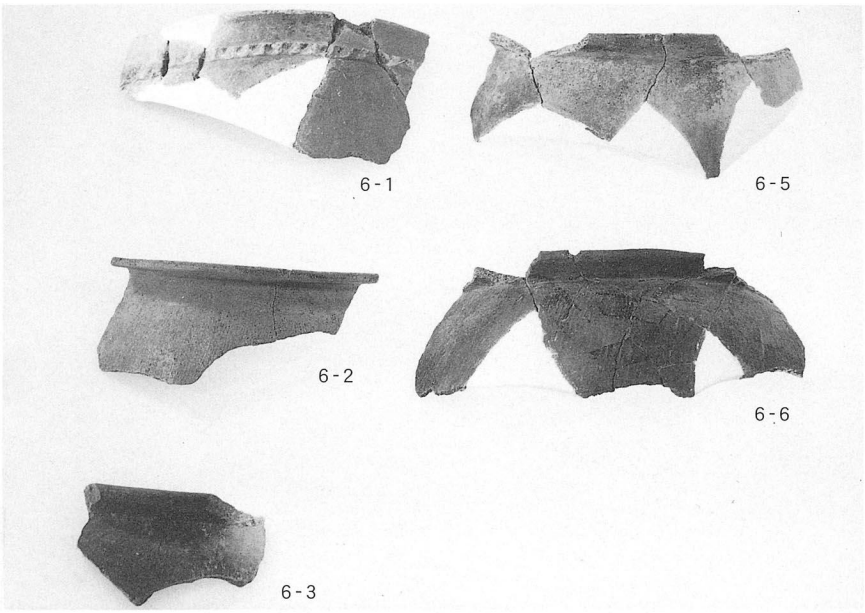
SK17

SK01
SK17·18
SK19·20

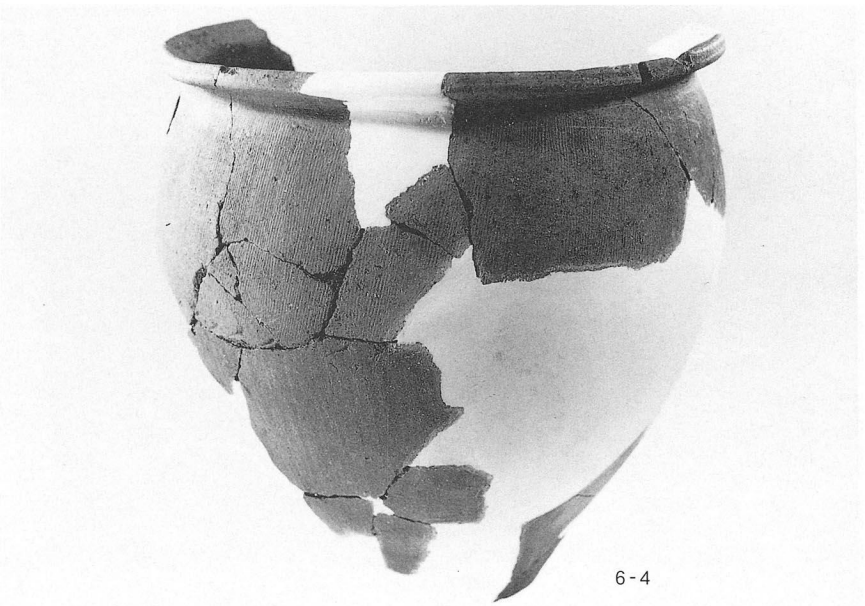
図版8



SK02　出土遺物

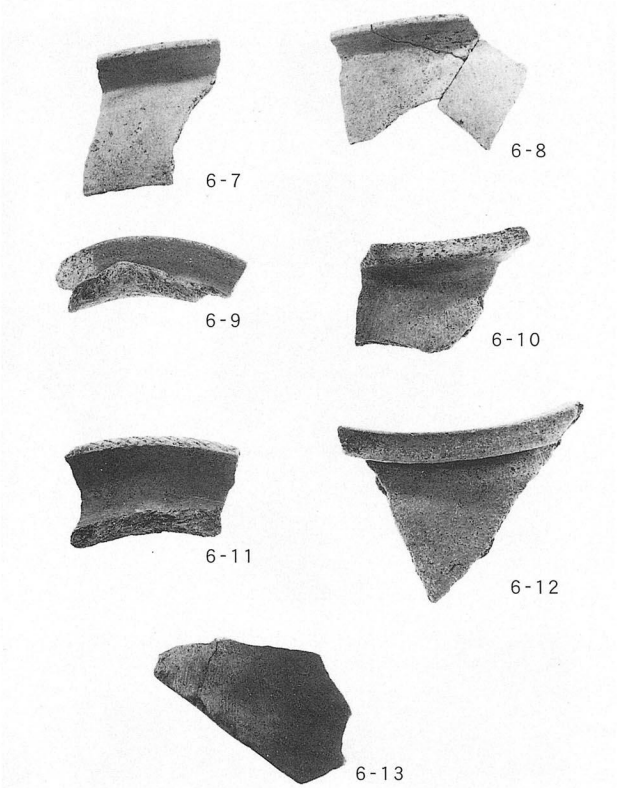


SK03　出土遺物

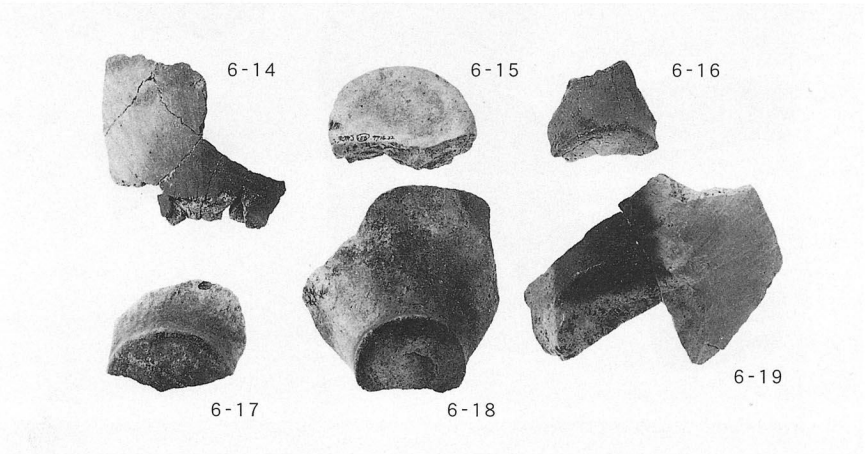


SK03　出土遺物

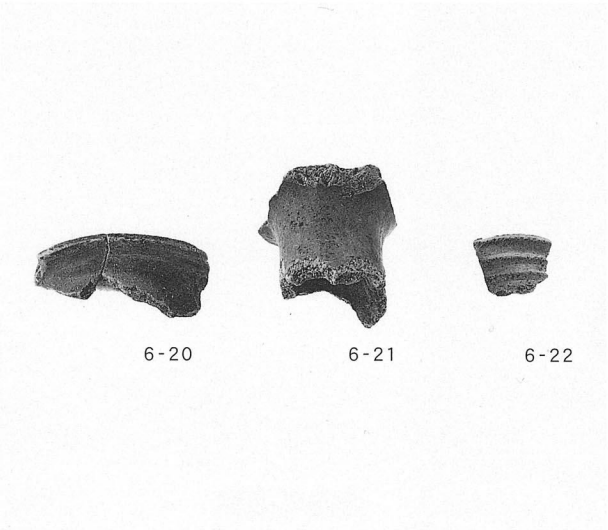
図版9



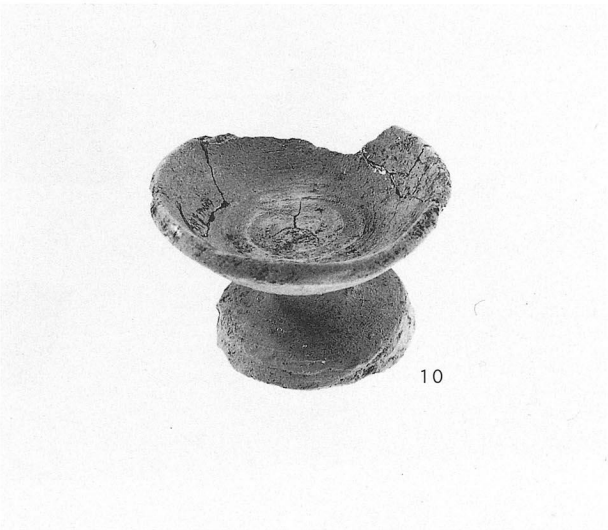
SK03　出土遺物



SK03　出土遺物

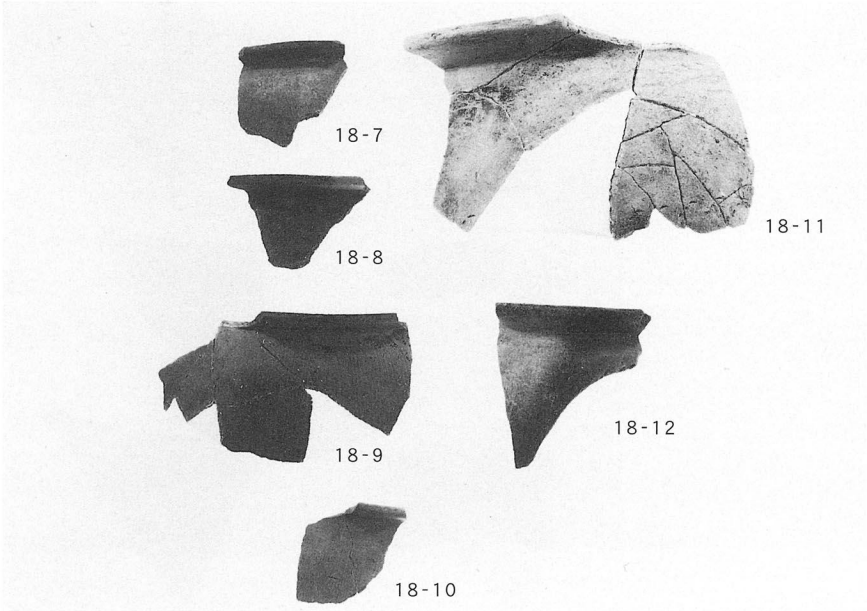


SK03　出土遺物

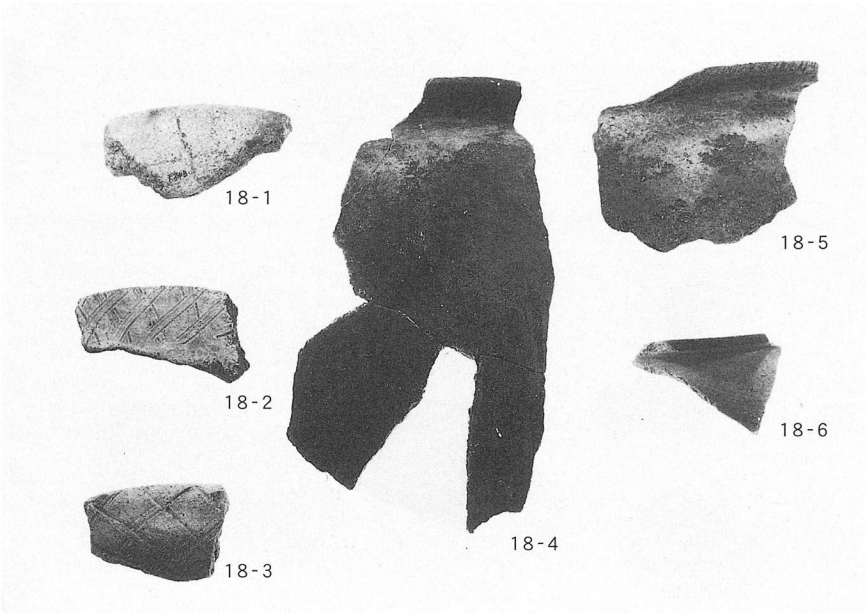


SK08　出土遺物

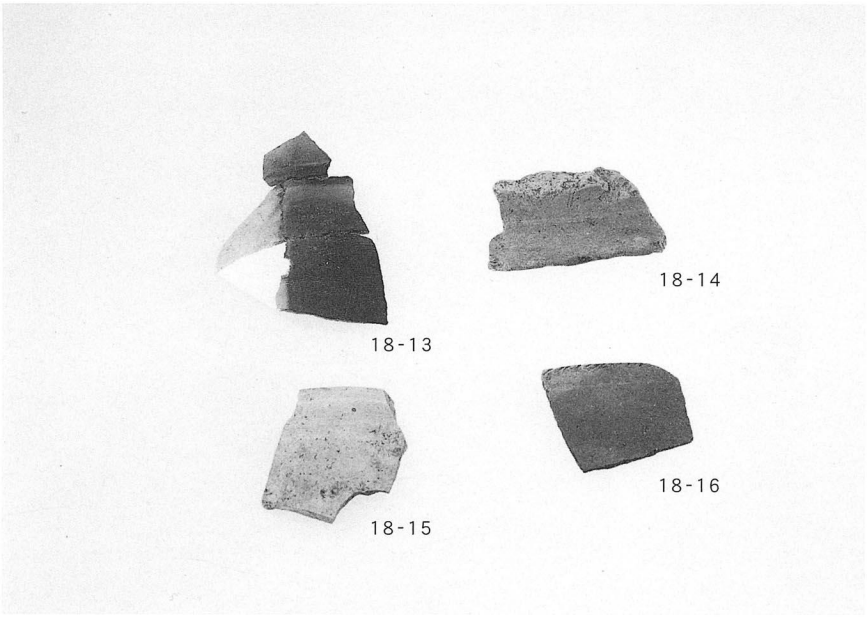
図版 10



遺構外遺物

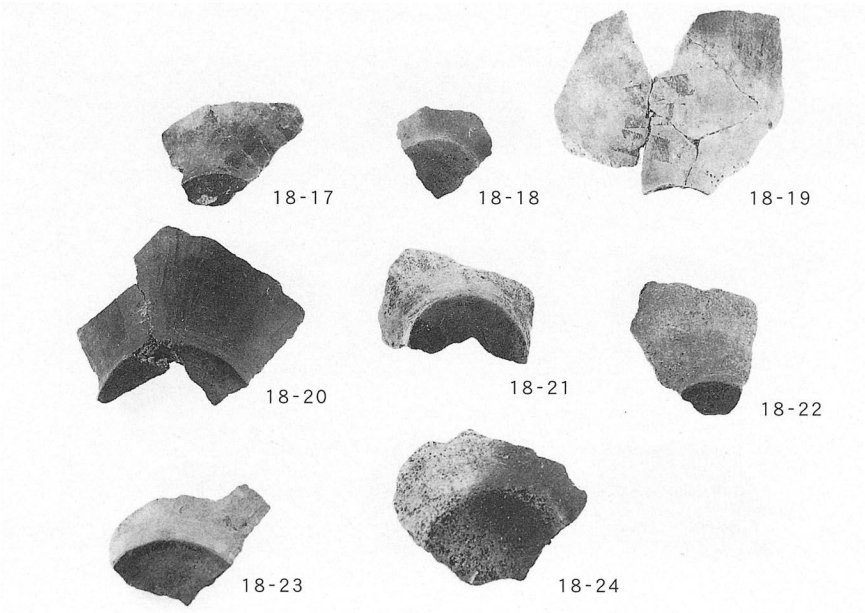


遺構外遺物

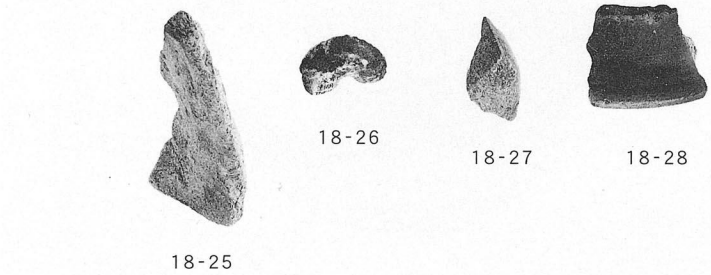


遺構外遺物

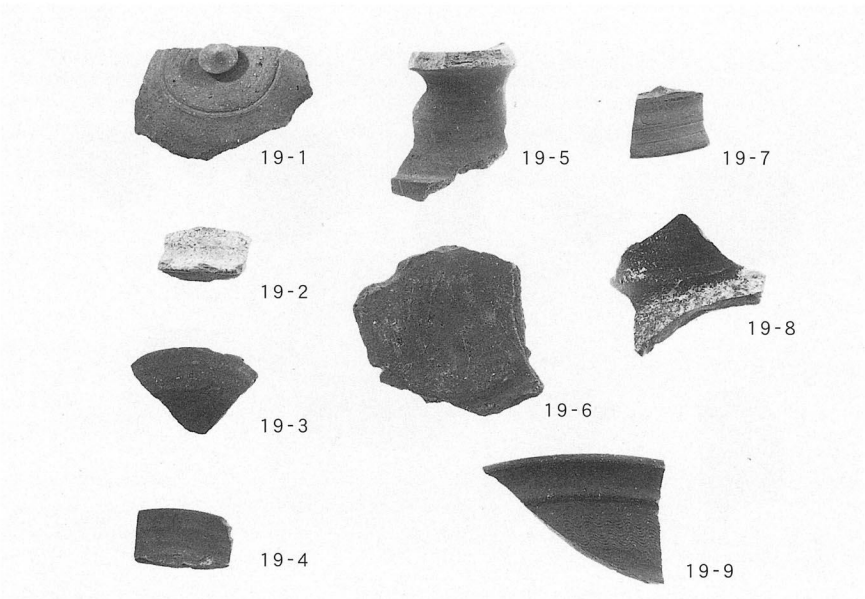
図版 11



遺構外遺物

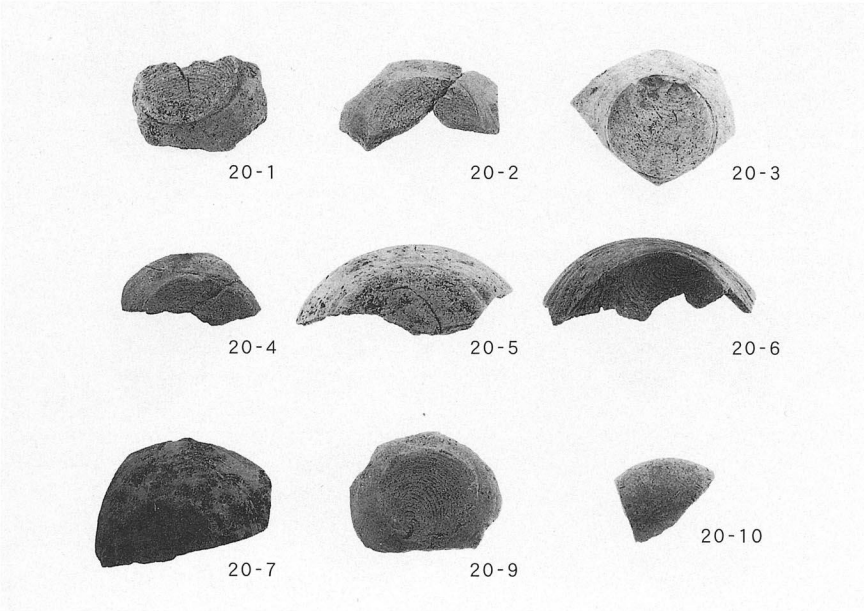


遺構外遺物



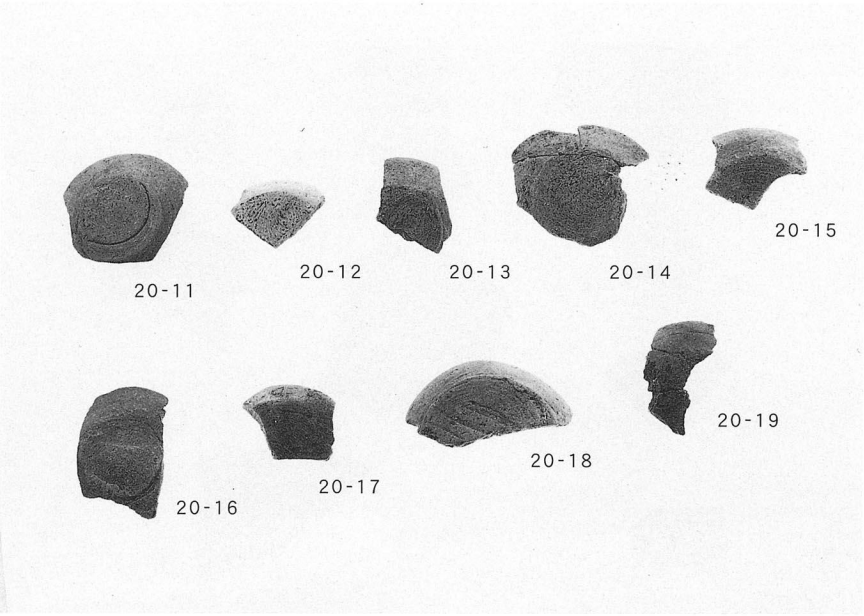
遺構外遺物

図版 12



遺構外遺物

遺構外遺物



遺構外遺物

報告書抄録

ふりがな	てんじんいせきだい１１じはっくつちょうさ
書名	天神遺跡第11次発掘調査
副書名	（社）中国建設弘済会事務所建設に伴う
巻次	－
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編集者名	片倉　愛美
編集機関	出雲市教育委員会
所在地	〒６９３－８５３１　島根県出雲市今市町１０９－１
発行年月日	２００１年　３月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天神遺跡	島根県 出雲市 塩治有原 町５丁目 ９番１	所在地		３５度 ２１分 １９秒	132度 ４４分 ５２秒	199904 ～ 199907	２８０m^2	（社）中国 建設弘済会 事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神遺跡	生活集落	弥生時代	土壙、溝状遺構	弥生土器	遺跡の大部分がすでに破壊されていた。

平成13年(2001)3月23日　印刷
平成13年(2001)3月30日　発行

(社)中国建設弘済会事務所建設に伴う

天神遺跡第11次発掘調査

発行　㈳中国建設弘済会
出雲市教育委員会

印刷　オリジナル